

第3分科会

学生による授業アンケートの現状と課題そして発展へ

報告者

井下 理 (慶應義塾大学 総合政策学部 教授)

功刀由紀子 (愛知大学 地域政策学部 教授 元副学長)

関内 隆 (東北大学 高等教育開発推進センター 副センター長 教授)

田中 岳 (九州大学 基幹教育院 教育企画開発部 准教授)

西川 鉦治 (中部大学 大学教育研究センター 次長)

コーディネーター

長谷川岳史 (龍谷大学 大学教育開発センター長 経営学部 教授)

「学生による授業アンケート」は、FDに関わる手法の代表格と見なされたこともあり、その名称の違いはあれども、現在、ほとんどの大学で実施されている。しかしながら、導入されてからかなりの年月が経っている大学が多いにも関わらず、未だ「どのように授業アンケートを行っているか」という実施方法に関する話題は、FD関係の集まりの中では定番となっている。

方法への関心が依然として高い一方で、ややもすると「何のために始めたのか」「何を目指したのか」という原点を見失ってはいないだろうか。原点を見失ったまま方法に焦点をあてても、「何が問題なのか」「現状の問題をどう解決すべきか」「将来的に何を目指しているのか」という重要課題は、いつまでも先が見えないまま棚上げされてしまうのではないか。本分科会テーマの背景には、こういった問題意識がある。

本分科会では、前半は5名の報告者による報告を中心に行い、後半は各参加者が持ち寄った現状と課題の情報をもとにして、「そもそも学生による授業アンケートとは何か」を考え、参加者全員でマクロ(大学教育)・ミクロ(教員・授業)の両視点から、今後の発展を見すえて「本音」で議論したい。

＜第3分科会＞

学生による授業アンケートの現状と課題そして発展へ

参加人数	126名
報告者	
第1報告者	井下 理 (慶應義塾大学 総合政策学部 教授)
第2報告者	功刀由紀子 (愛知大学 地域政策学部 教授 元副学長)
第3報告者	関内 隆 (東北大学 高等教育開発推進センター 副センター長 教授)
第4報告者	田中 岳 (九州大学 基幹教育院 教育企画開発部 准教授)
第5報告者	西川 鈺治 (中部大学 大学教育研究センター 次長)
コーディネーター	長谷川岳史 (龍谷大学 大学教育開発センター長 経営学部 教授)

1. 第3分科会の概要

第3分科会は、「学生による授業アンケートの現状と課題そして発展へ」をテーマに、方法への関心が依然として高い「授業アンケート」について、「何のために始めたのか」「何を目指したのか」という原点を再確認し、「何が問題なのか」「現状の問題をどう解決すべきか」「将来的に何を指しているのか」という重要課題を、参加者全員でマクロ(大学教育)・ミクロ(教員・授業)の両視点から議論することを目的とした。

報告者は、様々な立場・役職から「授業アンケート」に関わってこられた方々をお願いした。中でも中部大学の西川鈺治次長に加わっていただいたことは、第3分科会における多数の事務職員の参加を促したと考えられる。

また、ややもすれば議論が拡散してしまいがちなテーマに対して、井下理先生に問題提起と全体討議のファシリテーターをご担当いただき、そのもとで関内隆先生、西川次長、田中岳先生、功刀由紀子先生にご報告いただけたことで、従来の「授業アンケート」の議論にはない特色ある課題を浮かび上がらせた。

分科会の具体的内容は、報告者の方々の報告をご覧くださいことにして、ここでは、当日のスケジュールと、事前アンケートと事後アンケートにおいて参加者の方々からいただいた貴重な意見を紹介することで、情報提供したいと思う。

2. 当日のスケジュール

- 10:00-10:05 全体説明：長谷川岳史
(龍谷大学大学教育開発センター長)
- 10:05-10:25 井下 理
(慶應義塾大学 総合政策学部 教授)
「沿革・位置づけ・機能・活用を再考する
—課題の整理と今後の展開へ—」
- 10:25-12:00
報告1 関内 隆
(東北大学 高等教育開発推進センター副センター長 教授)
「学生による授業アンケートと教育改善PDCAサイクル」
報告2 西川鈺治
(中部大学 大学教育研究センター次長)
「中部大発「魅力ある授業づくり」
～個を大切に「授業評価」～」
- 報告3 田中 岳
(九州大学 基幹教育院 教育企画開発部 准教授)
「『授業アンケート』が悪者なのか」
- 報告4 功刀由紀子
(愛知大学 地域政策学部 教授 元副学長)
「授業評価アンケートとFD：
教学担当副学長・FD 委員長の経験を通して考える
課題」
- 13:30-14:30：部屋別の情報交換・ディスカッション
※参加者は適宜、希望する部屋に入り意見交換した。
関内先生：サブルーム1 (255室) (45名定員)
西川次長：サブルーム2 (254室) (45名定員)
田中先生：サブルーム3 (253室) (45名定員)
功刀先生：サブルーム4 (252室) (45名定員)

内容

①午前の報告の追加・補足説明

②情報交換・ディスカッション

14:30-14:40 移動・休憩

14:40-15:30 全体討議

※井下理先生をファシリテーターとして、各部屋の状況等をもとに全体討議を行った。

15:30 終了。分科会独自の事後アンケート回収。

3. 参加者に対する事前アンケート

第3分科会では、コンソーシアム京都の川面きよ専門研究員のご協力により、参加者への事前アンケートを行った。このアンケートは、参加者の問題意識を知ることが目的としており、結果を事前に報告者間で共有することができたため、分科会の運営上、大変参考になった。ただし、課題は多岐にわたり、分科会ですべてを取り上げることはできなかった。また、アンケート実施の依頼文中に「授業アンケート」を持参いただくようお願いをしたが、当日のスケジュールの中では、休憩時間等で情報交換を行っていただく形となってしまった。これはコーディネーターの責任である。

ここで、分科会で取り上げることができなかった課題も含め、事前アンケートの設問「この分科会で『話題にしてもらいたい点』があれば、記述してください」の内容を紹介する。これによって、参加者の問題意識とともに、「授業アンケート」の課題の多様性を知ることができる。

なお、記入頂いた方の個人名や所属などが特定される記述、また、文意が伝わりにくい表現などについては、長谷川の責任で削除あるいは修正している。

①アンケートを取る時期はいつか? : 本学は最終講義の時間内で実施している。しかし、授業全体を一括して、平均的な回答になる。授業評価は、1回1回の授業内容の評価が異なっていないはず。毎回の授業でその都度評価を得ていけば、意見の内容にも信憑性があり、即、次回にフィードバックできるという傾向も増してきているのではないかと。②学生自身の授業参加状況も加味した評価項目になっているか? : 自分の参加状況とは無関係に回答している状況がみられる。“難しい”、“分かりにくい”、“スピードが速い(遅い)”など。授業は教員と学生で作りに上げていくもの、双方の関わり合いを加味した評価がほしい。③授業評価の点

数が(得点が)一人歩きしていないか? : 教師に対する好き嫌いの感情が入っていることあり、少人数では無記名でも記入学生が判別されるので、評価の妥当性を欠く回答になっていることがある。反対に100名~90名のクラスでは真面目に記載しない状況も含まれてくる。

「話題にしてもらいたい点」を箇条書きにします。1. 評価結果の公表の是非とその功罪について 2. 学生による授業評価が、本当に授業改善につながっているか、改善につながる授業評価となっているか 3. 「授業改善のための(学生による)授業アンケート」: 授業評価の評価というのは、言い過ぎではないか。アンケート調査であくまでも大まかなものにすぎないと思いますので、評価という教員にとってはある面刺激的な表現は使う必要はないと思う。

授業評価の内容、実施頻度、結果の活用方法について話題にいただければ大変うれしく思います。英国での現状(大学での授業評価のあり方)をお話いただければ、大変有用かと思えます。(まねるのではなく、本質を見極めるため)

学生の授業アンケート結果を、真摯に受け止める教員と、学生の意見は信用できない、自由記載欄に担当教員を中傷する内容を書かれて憤慨だとする教員などいます。どのように受け止めたらいいか、信頼性はどうかなどをお聞きしたいと思います。

Web 授業評価への切り替えについて: 多くの大学では紙による授業評価が実施されています。これによる問題点は以下の通りです。①記入から集計までの間に紛失(出した出さないなどの思い違い含め)の可能性はある。②集計からフィードバックに時間がかかる。③大量の紙を必要とする。④授業時間外の実施が難しい(時間外にすると回答率が落ちる)。Webへの切り替えの否定的理由として、「回答率」が激減する、ということが良くあげられますが、授業中に半ば強制的に書かせる内容よりも、自発的に記入してもらい「質の高い」回答が得られるのであれば、Webのほうが良いと考えています。むしろ強制的に書かせないことで発生する回収率の低下に関して、回収率を上げるための工夫を、どの大学も考えなければいけないのではないかと考えています。この点について話題にして頂ければと思います。また、半期15コマを厳格化する方向性においては、授業時間中に授業評価を実施することは黙認されている状況ですが、本来であれば期末試験同様、授業評価も15コマの中で実施することはNGのはずです。多くの大学で授業時間内に実施されていることと思いますが、この点についても、関係者や授業評価の専門家の先生がいれば、伺ってみたいです。

授業評価の Web 化の是非について。本務校では新年度の4月より授業評価の Web 化導入が決定し、それに向けての準備を進めている段階であるが、一部の教員からは授業評価の Web 化に対して疑問の声（紙ベースと比較してどれだけのメリットがあるのか、回収率低下への危惧、等）も出ている。ディスカッションでは、すでに Web で授業評価を導入している大学関係者から Web 化に伴うメリット・デメリット、および評価結果の活用法（公開手法も含めて）についての報告をぜひ伺えればと思っている。

次のようなことが知りたいです。1) 具体的に学生へのアンケートは、どれくらいの大学が、どのような内容の設問、どれくらいのボリューム、どれくらいの頻度、そしてどのような活用がなされているのか？2) 学生が履修している授業数に対して、どの程度の学生の負担になっているのか、またそれでデータの信ぴょう性はどの程度と考えられるのか？

日本の大学教育でも、学生による授業アンケートをいっそう普及・充実させる必要はあると考えられるが、各大学における実際の実践や研究の成果をふまえて、学生による授業アンケートの効果について実質的な議論をし、情報の共有ができるような機会を設けて頂きたい（①大学全体や学部全体、あるいは各専攻や各課程などの組織的な授業改善、②個々の授業アンケートの回答者自身の授業改善に、授業アンケートの結果や分析結果は実際にどの程度役に立っているのかを、実証的なデータに基づいて議論してほしい。）

本学では、マークシートを使用して授業アンケートを実施していますが、数年前から学生支援システムのアンケート機能を活用する案が出ております。他大学の状況をうかがうと、システムを利用すると学生の回答率が大きく下がるようですが、回答率が下がらない方法や工夫を実践されているケースはあるのでしょうか。

本学では、講義・演習・実習の全科目授業アンケートを最終日に実施している。集計し各教員の授業改善を目的としているが、教員の中には教員評価と同一視して、学生から高評価を得ることを目的としている者もいる。一方、学生の中に少数ながら、意図的に教員に低い評価を行ったり、不適切な内容を書くなど無記名の弊害がおきている。記名にしてみたこともある。ただしこれは本来の姿ではない。学生がまじめにアンケートに答える環境にするには、今以上どのような努力が必要でしょうか。教員の姿勢を一定に維持するにはどうしたら良いのでしょうか。また、授業アンケートをとり、集計後教員に戻しフィードバックシート

を書いて学生に図書館その他で公表している。さらに教員の教育力向上のためどのように活用して行ったらよいか教えて下さい。

授業アンケートの現状について、できるだけ多くの大学のデータを提示して頂ければありがたい。また、それらのデータから見えてくる問題点やその解決策の提案をお聞かせいただければありがたい。

どのように活用しているか。集計の仕方。どのくらいの費用（予算）でやっているか（予算とその内訳）。

授業アンケート項目の設定について、何を基準としているか。例えば、授業担当者の教育技術的な側面（話が聞き取りやすい、板書が見やすい、配布資料が的確である等々）を基準にしている。あるいは、教育目標や授業の目標に沿って、学生の理解度を掌握する項目立てをする。その他、どのような視点でアンケート項目を立てているか。

①あらゆる取組において、教員の方々のスキルアップや教授能力の評価等々だけでなく、職員等も含めた関係者の役割も極めて重要と思います。可能な範囲で職員等の関係者の役割も踏まえた、GP・取組などございましたら取り上げていただけましたら幸いです。②報告者の大学における目的に照らして、授業評価アンケートを実施することにより、教員・学生・大学のそれぞれにおいてメリットとは何なのか、仮にそれぞれにデメリットもあるとすれば何なのか、また他に考えられるステックホルダーは？③報告者の大学における目的に照らして、授業評価アンケートによる成果を上げるために、最も重要と考えるシステムとは何か？

半期各授業で毎回授業の振り返りシートその他、全授業終了時大学側のFDアンケートの他に独自の授業アンケートをとっています。内容は授業理解度・授業満足度・講師側の授業進行度合い・学生個人が伸びた力等の評価です。このうち特に自分が注目しているのは授業理解度と満足度の差異です。満足度欄には自由記述をさせているので、そこから分類し導かれるのは、学んだことが明確になっている学生は理解度とも満足度も高く、学んだことが「楽しかった」「先生が面白い」「よくわかった」等曖昧な記述をしている学生は学びがなかった様で理解はしたが満足していないと推測しています。

授業評価アンケートの考え方として、一つは個々の授業の評価によって授業のレベルを上げて、結果として大学全体として授業のレベルを上げるというもの（自分はこの考えなのですが）、もう一つには教員個々の授業の評価をする

<p>というものでとどまるものがあると思います。評価をすること自体が全体のレベルを上げることになるとはおもうのですが、評価の結果を大学全体の教育のレベル向上につながる効果的なものがあるのでしょうか。</p>	<p>に授業をやっているかを問うことに意味があるのでしょうか。「シラバスで予告された以上の授業内容であった。」では不適切でしょうか。</p>
<p>企業関係者ですが、弊社でもアンケート調査を行って一番感じるのは、アンケートに書かれた指摘事項等に対し、ちゃんと是正処置等の対応をしないと、アンケートを取る事自体がお客様の満足度を下げってしまうという事実です(次年度のアンケート時に、アンケートに回答しても何もレスポンスが無いので、アンケートを拒否します、などの返事)。大学の場合はアンケートを取る対象が毎年変わるので、そのような事は無いかも知れませんが、アンケート結果に対する是正処置や結果の学生への報告はどのように行われているのでしょうか。また、授業アンケートをIRに生かしている事例があれば知りたいと思います。</p>	<p>勤務校では、授業アンケートの結果についてのコメントには改善点を書くことにしているが、その後、それをどう授業に反映しているかは、追跡していない。この点を体系的に行なっている事例があれば知りたい。・学期途中にアンケートを実施し、すぐに授業にフィードバックする方式を採用している事例があれば知りたい。</p>
<p>(1) 授業評価アンケートを実施し、結果について科目ごとに担当教員から反省と課題を報告書として文書で提出してもらっていますが、実施が形骸化し、アンケートをとりっぱなしで授業改善に生かされていません。どのようにしたら教員はアンケートをすすんで実施し、学生からの批判を真摯に受け止め授業改善に生かしてくれるのでしょうか。(2) 授業評価アンケートの項目内容について、さまざまな科目の担当者からこの項目では自分の授業は評価できないと言われます。普遍的な評価項目はあるのでしょうか。</p>	<p>授業評価アンケートの実施方法、および結果を元に有効的な活用方法</p> <p>学生による授業評価アンケートの公開の実際と課題について、本学は、学生による授業評価アンケート結果は、学長・学部長の他、科目担当教員のみならず知らされており、FD委員会や教務委員会で、確認することなどができません。FDの検討、企画につながる事ができず、改善したいと考えていますが、教員の抵抗感が強く、公開に踏み切ることが困難です。各大学の実際やご意見を伺いたいと思っています。</p>
<p>授業アンケート結果の活用法。教員の評価へアンケートを反映させているのか。アンケート結果の信頼性。アンケート結果の教員へのフィードバック方法や、結果に基づく対応方法など</p>	<p>以下の3点にとくに関心があります。1) 電子的に授業アンケートを実施している大学の事例について：回収率が低いことが予想されますが、回収率をあげるためにどのような工夫をして実施しているのか。2) 授業アンケート結果の活用について：全学的に授業アンケートを実施している大学において、どのような組織的活用がなされているか。3) 記名式の授業アンケートについて：授業アンケートを学習成果と関係付けて解析するため記名式の授業アンケートを導入している大学もあるようです。記名式の授業アンケートをどのように実施し、またそのアンケート結果をどのように活用されているか。</p>
<p>以下の点につきまして、ヒントをいただければ幸いです。 1. 授業アンケート結果の有効な活用方法の具体例について。 2. 授業に対して、学生が一方向的な評価をしないように、学生自身が授業への取り組みを内省する方法について。 3. 自由記述欄で、建設的な意見を出すように、学生を方向づける方法について。 4. 授業アンケートが学生の負担になっていることについて。1) 全教員・全科目で実施する必要があるのでしょうか。2) 質問項目数をかなり絞り込めば、負担感は減るものなのでしょうか。(例えば3項目くらいにすると楽なののでしょうか。あるいは回答する以上は、1項目でも負担感はあるのでしょうか。) 5. それぞれの大学や教員の教育目標が明確であれば、それをもとに授業アンケート項目を作ればよいわけですが、FD活動として、どのような大学や授業であっても必須の質問項目(質問項目のセット)というものはあるのでしょうか。6. シラバス通り</p>	<p>学生の授業についての知識、理解力と、授業のレベル(内容)との関係で、学生の授業への評価に差が出てくるのではないかと思います。つまり理解度が高い学生は授業が平易なこととなりますし、理解度が適当な位置にある人は、それなりに評価はよいということになるかもしれません。この点においての授業の進め方のような方向となるのでしょうか。また理解度を補う意味での予習や復習など自習時間との関係もどのように考えると学生のレベル向上につながりますでしょうか。</p>
	<p>①教員・職員・学生の三者の授業アンケートの理解を深めていくためには、どのようにしたらよいか。②授業アンケートの活用方法について</p>

アンケートの実施・結果のフィードバック時期、学生の記名について(本学では無記名であるが、真摯に回答しないとの議論があるため。)

4. 参加者に対する分科会の事後アンケート

第3分科会では、FD フォーラムのアンケートとは別に、分科会終了後、分科会独自のアンケートを行った。設問は以下の通りである。

Q1 本分科会に参加したことによる「気づき」や「発見」があれば記入してください。

Q2 本分科会を終えて、「残された課題」と感じる点があれば記入してください。

Q3 その他、ご感想等、自由に記入してください。

アンケート結果からは、分科会の満足度や課題がみてとれると同時に、Q1の「気づき」「発見」からQ2の「残された課題」への流れの中で、「授業アンケート」に対する問題意識が、実施から活用・改善へ、個々の授業からカリキュラム全体へ、教員個人から学生や組織全体へと派生しているのがわかる。この点は、全体討議の中で発せられた「授業アンケートは誰のためのものか?」という問いに対する議論の中でもうかがえた。

このアンケート結果からは、本分科会が、成し得た点と、課題として残した点が明確に読み取れる。また、今後の「授業アンケート」に関する議論の水準も示しているように思う。ここに可能な限りいただいた意見を掲載することで、今後の「授業アンケート」に関する議論の発展を期待したい。

なお、記入頂いた方の個人名や所属などが特定される記述、また、文意が伝わりにくい表現などについては、長谷川の責任で削除あるいは修正している。

Q1 本分科会に参加したことによる「気づき」や「発見」があれば記入してください。
満足度調査から学習到達度調査へのパラダイムシフトとの観点は大変参考になった。
各大学の取り組み方が参考に大変なりました。現状から、いかに教員・学生・職員の共有が、実に必要であるか、理解できた。
アンケートの位置づけの難しさや、結果の活かし方やフィードバック方法。

教員・職員・(学生)と「よい授業とは?」ということを話す機会を設けることが、第一歩として必要だと感じました。

他大学の事例など参考になる点は多いものの、本学でどうしぼって改善していくか、という課題を大きく感じたとともに、Webや2種のアンケート実施の事も例に本学で検討したい。FDに終わりはないと私も感じています。

学生と教員間のコミュニケーションツールとしての授業アンケート

多くの大学・先生においては、まだ授業アンケートについて良い答えを得ておられないことを共有できた。一方で共通課題は多くあることもわかったことは一つの成果だった。

授業評価アンケートのあり方を考える上で大変役に立った。本学では回収率のみが気にされている感があるが、教員と学生のコミュニケーションのツールとして、また教育システムを振り返る手段として活用されている事例を学ぶことができた。

多くの大学が同じ問題に会い、共通の問題意識を持つことで、大学にもどり改めて立ち向かう決意を固めた。学内の大きな逆風に対し、説明するには多角的な考察が必要であることを確信しました。

良い授業とは何か、を考えて授業評価をしている学生がどの程度いるのか、教員もそれを考えているのか。

授業アンケートの運営で、多々問題点をかかえておりましたが、悩みはどれも同じだと感じました。どんなやり方にするのであっても、教員へのなげかけと信頼が大切だと感じました。

授業アンケートから、思っていた以上に関係する項目が多いこと。FD活動はもっと多様性があってもよい。授業アンケートの活用についてもっと考える必要があると思いました。

授業評価を活用していくには、これまで以上に教職協働がキーになると改めて気づかされました。

学生を学習者として育てるという視点の中でアンケートを組み込むこと。

大学でFD委員会のメンバーをしているが、「授業アンケート」については、さまざまな意見が出ている現状である。そのうちの一つに、学生の評価が教員の雇用や昇任に影響していると思っていたが、本日の先生方のお話から、案外その点は低い割合であることがわかり、そのことは良かったと思う。

各大学でマンネリ化されたアンケートをどう変えていくか、悩みは一緒であり、その中で報告者のお話は本学での改善のヒントとなりました。

授業アンケートを実施する=FD ではない!

授業評価と授業改善は、アンケートの意味が異なる点

授業アンケートを単独で考えてきたが、今すすめている質的転換のアクションプランの中の一つとしてとらえ、相互にリンクさせる必要に気づいた。

アンケートを教員と学生のコミュニケーションのために活用するという方向性を発見(再発見)できた。

学生のアンケート回答率(回収率)が高くなくとも、「生の声」が聞くことが出来ればいいのでは、という考え方。

本学でのアンケートの歴史は長いですが、途中で担当したため、当初の活用目的等をあまり理解していない。早速、確認を行うこととしたい。また、現時点での活用目的が妥当であるのか、それとも見直しが必要なのか検討したい。

学生による授業アンケートを行っているが、実施しているという安心感にひたっていることをあらためて感じた。授業アンケートの結果をどう活かしていくかは、教員の意識が重要であると強く思った。
意外や授業評価をした後の使用意図がバラバラでした。
本分科会では、貴重なご意見を拝受致しました。本当にありがとうございました。アンケート評価では、学生の意見が大切であると感じました。
授業アンケートに課題を抱えている大学が多いことが改めて認識された。満足度を目標とするのではなく、達成を目標としなければならないということを改めて認識し、アンケートの見直しをしたい。
授業アンケート結果を人事考課のデータにするのは相応しくないという意見が多かった点。アンケート結果と学生の成績をリンクする等の教学上の資料作りへの取り組み。アンケートをWebにした場合のデメリット面(回収率の問題)。FDは個人の努力義務に帰結させるのではなく、大学をあげて組織的に支援していかなくてはならない。
授業アンケートは最終的に教員のためと思った。様々な視点が高えたことは良かった。
功刀先生の話「組織的な対応が必要な課題を見つける」ことが、FD(特にアンケート)の目的。これが、これまで本学に欠けていた視点。
改めてFD活動は、それぞれの工夫の上に進められるもので、正解はない、ということだと感じた。具体的には、アンケートを紙にするかWebにするかで思案している。本大学の実情に合わせて、よく考えて結論を出したい。
組織的な取り組みや仕組みの重要性
本学の授業評価アンケートへの取り組みの遅れ
発表の中に活用できる内容もあり、今後の参考にさせていただきたい。
アンケートの原点に帰ることができてよかった。
自分が所属している大学の授業評価アンケートシステムは、比較的健全であることがわかった。全科目で実施し、結果を全て公開している。10年くらい前から実施している。ただ、その結果が授業改善につながっているかどうかは不明である。
授業評価が回答率だけでないということが発見だった。授業評価が学生と教員のコミュニケーションツール。
Web上での授業アンケート実施について、今までどちらかという否定的だったが、中部大学での取り組みをお聞きして、前向きにとらえることができるようになった。
授業アンケートの活用方法。教員の実践記録に今後の課題を記載させる。学生との懇談内容。授業のカリキュラム全体への提言。

Q2 本分科会を終えて、「残された課題」と感じる点があれば記入してください。
アンケート結果の教員へのフィードバックの後、教員が即、授業内容を変えることは難しいこと。学生は次の年次に進級するので、同じ学生に変更した点を示すことはできない。
教学IRのためのデータとしてアンケート結果が必要になるのではと思ったが、その話題が全くなかった。

Web又は紙ベースは、現状では、やはり、紙ベースで行っているのがベストで、Webでのトラブルは、予算の関係でむずかしい問題である。一つの統一したものと安く(金額)共有できるのではないか。
アンケートの改善と結果の反映方法
冊子にもある第3分科会の巻頭の文章中にある「将来的に何を目標しているのか」という内容の話が聞けると思っていた。アンケート取りっぱなしという現状から、結果を用いての次の一歩を踏み出せるヒントを見つけて帰りたい。質問で手を挙げるができなかった弱さが悔やまれる。
本学での授業アンケートをどうすべきか?なくしてもよいか?他の改善ツールや方法と合わせて考えたい。
本質的なFDのためのアンケートと認証評価や義務的なアンケート実施のベクトルの違いが同一に向かうのか。教員・学生のアンケート疲れが感じられる。
アンケートの結果を改善のアクションにつなげていくことがまだ十分でない。今はアンケートを取ることが目的化しているように思われます(企業の参加者から見て)
多くの大学の状況は認識できた。解はないにしても、何をすべきかを今後討議できればと思う。
将来の「授業アンケート」像について、参加者が共有する形で、一つの像が浮かび上がって来なかったような気持ち悪さが残った。
未来に向けての効果的なやり方の結論が出ていないと思いました。まだまだ多くの検討が必要な分野だと感じました。
「組織的」支援について、さらに考えたいと思った。アンケートの結果から何を改善するか、どうするか、など。
授業アンケートの調査設計について、及び改善ポイントについての事例発表や情報交換があれば参考になります。
アンケートは誰のためのものか?学生の成長に寄与するシステム中のパーツとなっているか?
授業改善の方法・手法
教員のFDに対する意識改革について
FDの義務と授業アンケートの関係
これまでアンケート結果を自助努力のきっかけにするという方法をとってきたが、関連科目間の連携(カリキュラムマップの作成)と結びつけて、教員グループ(専攻・学科、全体)の問題、カリキュラムと学習成果の問題として認識していかなければならないと感じた(大きな課題である)。
アンケートを「何のために行うのか」「何に活用するのか」を知りたいという参加の動機に対し、「個々の大学や部署で考える必要がある」という考え以外、事例も含め、ほとんど聞かれなかった点。今後の課題はもちろんのことだが、報告者の先生方の見解をお聞きしたかった。
自大学に成果を還元すること
質問内容。目的をはっきりさせた上で共通項目を決める裏付け。
授業改善は教員個人の問題に限定されず、組織的に取り組まなくてはならないという点。FDをFD委員会のものにせず、全学のものにするにはどうしたらいいかという問題に立ち返った。
アンケートの活用方法について、誰がどのように活用するのか?(可視化を含めて)。結果によっては個々の学生に対応した方策を考えなくてはならない。学生を「消費者」として見るのか。

技術的な問題に話がいきがちであるが、根本的な議論をしたかった。
FSDとしてアンケートが行われることの可能性。
アンケートは、結果的に何かの尺度で数値化しています。その結果、「良い授業(教育)」＝「点数の高い授業」という見方が、自然と出てくるように思います。一方で、「どういう教育が良い教育なのか」という問題があまり議論されないまま、アンケートを実施しているように思います。(もちろん、良い教育なるものを定義することはできないと思いますが・・・) 今後は、そうした本質的な問題も考えていかなければならないように思いました。
よい授業とは何か。Web 調査の回答率を高めるのにはどうしたらよいか。
今のアンケートの問題点は明らかになってよかった。しかし、その先にあるものが見えていない。
結局「授業アンケート」がどのように教育改善や教員のスキルアップにつながっているのか、具体的に見えてこない。
授業評価が実際に授業の改善にどう結びつけられるかということ。
マンネリ化している授業アンケートを今後どのように変えてゆけばよいか。
学生個人の成績とのクロス分析

Q3 その他、ご感想等、自由に記入してください。
報告者の人数がやはり多いのでは。ただ、どの話も有意義だったので選択は難しいでしょうけれど。
とても良い勉強になりました。もっと若い職員にも参加させてあげたいと感じました。
人事考課への発展の難しさを非常に感じました。
次に期待するとともに、会場で発言できる思い切りをつけ、また参加したい。
教職について2年目なので、全てが学び気づきだった。
ある大学では、授業アンケートを学生自身の授業への取り組み態度など、学生自身の気づき・振り返り(PDCA)のツールとして活用しています。また、アンケートの質問内容を大学の人材育成目標(育てほしい姿)を意識した内容としている(アンケートに答えることにより学生に気づきを与える。また大学からの学生に対するメッセージ)。
大変よく準備がなされた分科会だったと思います。問題が多岐にわたっていたため、少し雑ぱくになったきらいはある。
授業アンケートを人事に適用する場合や、賞与・給与に(減額を目的とする)反映する動きがある中、とても大切な危険性のある内容であることを再確認できた。
本日はありがとうございました。ぜひ次年もこのテーマをお願いします。
Fランと俗に言われる大学では教育のコンテンツも目標も異なってくるように思われる。
初めて参加しました。参加者の方の取り組み、熱意に圧倒されました。評価表の反映のされ方が、それぞれの大学でどのように行われているのか参考になりました。
大学認証評価のための授業アンケートならやめたい。しかし、活かす方法を考えていきたい。
今回も考えるヒント満載だった。可能なら次年度以降もまた参加したい。

分科会の分科会は時間ももったいなかったかなと思う。少人数にするのであれば、話題の枠組みを提供されると良かったのではと思う。
私は事務職員ですが、教員の方々の考えを聞くことができ大変有意義でした。また、事務職員の方々にも接することができ、様々な環境で奮闘されており、大変励みになりました。
他大学の授業アンケートやFD活動の様子をうかがうことができ、所属大学の進んでいる点や充実している点、また、今後課題とするべき点が少し整理できたように思いました。
運営ご苦勞様でした。
学習・教育評価の視点から授業評価の見通しがほしい。形式的評価や学生主体の「深い学び」への結びつきをアンケート設計から考える視点。毎回学生とやり取りする、課題を与えてフィードバックする、日常の活動がアンケート設計に結びつくか、代替品になりうるか、悩みます。

以上

沿革・位置づけ・機能・活用を再考する — 課題の整理と今後の展開へ —

慶應義塾大学 総合政策学部 教授 井下 理

第18回 大学コンソシアム京都 第3分科会 学生による授業評価

沿革・位置づけ・機能・活用を再考する

— 課題の整理と今後の展開へ —

慶應義塾大学
SFC(湘南藤沢キャンパス)
2013.2.24
井下 理 (いのした おさむ)
inos@sfc.keio.ac.jp

- 1 沿革 …… 90年代。推移・発展
- 2 位置づけ… 大学教育改革の装置の一つ
- 3 目的と機能 …… 授業改善／説明責任
…… 監視効果／鏡映的自覚効果
…… 顧客志向／
- 4 課題 …… 費用対効果／社会調査への理解
…… 問題の原因・帰結の混同
…… 過剰期待／過小評価
- 5 今後へ …… 一点突破の発想からの脱皮

1 日本での始まり

1990年 多摩大学、ICU、東海大など
全科目で組織的取組（慶應SFC）

- 大学事務局・教員・学生・
外部解析会社の協働作業
- SFC：結果の取り扱いの＜2大原則＞
 - ▲ 原則1 個別結果の非公開
 - ▲ 原則2 人事考課に用いない
- デファクト・スタンダード化

2 「学生による授業評価」の位置づけ

◆ 同時多発的な改革のひとつ

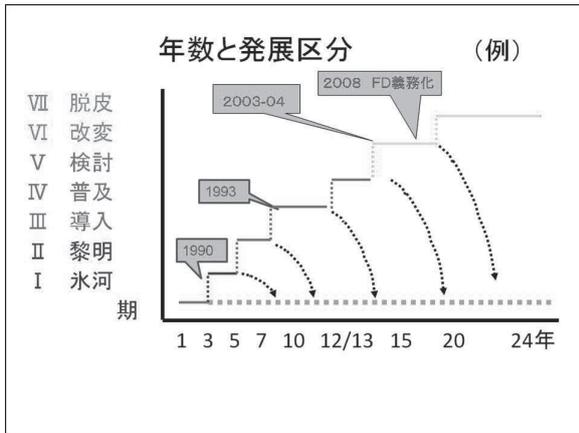
- シラバス／セメスター制
- インテンシブ外国語教育／情報処理教育
- TA, SA制度／オフィスアワー
- CNS環境の整備
- その他

3 「学生による授業評価」の 目的と機能

- 授業改善／教授技能の向上
- 学習意欲の喚起と向上 ★
- 教育理念の実現
- 機能＝監視／鏡映的自覚／
顧客重視／学習者の復権
- ★ 学生参加／参画／達成感
engagement／commitment

学生による授業評価： 7つの発達段階

- 第7期 第2次変革期／脱皮・衰退・発展期
- 第6期 第1次変革期／改良・改変期
- 第5期 再検討期・再吟味期
- 第4期 普及期
- 第3期 導入期
- 第2期 黎明期
- 第1期 氷河期



4 課題: 「授業評価」の改善

- 方法／手法の改善
- 調査結果の分析
- 調査結果の表現・伝達の改善
- 活用の実質化
- 目的・理念の再確認／枠組み再編
- 費用対効果／社会調査への理解
- 過剰期待と過小評価の是正
- 問題の原因・帰結の整理

慶應義塾大学SFCにおける
授業評価の変革: 2つのポイント

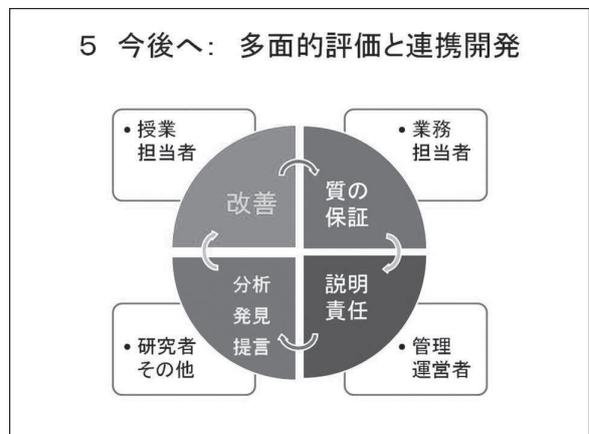
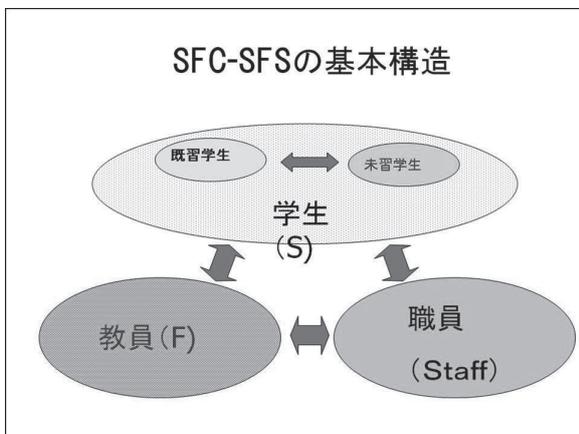
- 1 媒体を変更
 - 紙による調査からWebへ
- 2 基本概念を変革
 - モニターからコミュニケーションへ

●方向2: 見直しと再編方向●
新システムへの脱皮

SFC-SFS

Site For Communication (SFC)
among Students, Faculty and Staff

学生・教員・職員の間
Webを使った情報流通システム



1. 大学当局に取ってのFDとは

日本の大学教育において、FDという言葉が叫ばれ始めて既に20年近くが過ぎようとしている。当初、「FDの理念・目的とは何か」が盛んに議論される一方で、FDの具体的な行為は、学生による授業評価アンケートの実施であることが強調されていた。特に、1998年の大学審議会答申で明示された「FDの努力義務」に後押しされるように、混沌としたFDの理念論争はさて置き、多くの大学はいかにして授業評価アンケートを学内に導入するか、その方策に議論を集中させていた。

一方、大学進学率が50%を超えた現在、多様な入試方法の導入とも相まって、学生の多様化が進んでいる。大学入学時の学力のみならず、進学の目的や高校までの学習歴など、多方面にわたって多様化した学生が、同じキャンパスで大学生活を送っている。このような学生に対し、一人ひとりに目を向けた質の高い教育や学習支援の提供は、教学を第一義とする大学の社会的責務として、必須の要件であることは言うまでもない。

そのため、大学教育の質保証が強く求められている。大学の定期的な認証評価の導入や、2008年の大学設置基準の一部改正による「組織的FDの義務化」に加え、中央教育審議会による2008年12月の答申「学士課程教育の構築に向けて」では、教育内容や方法に関する詳細な方策までが提案されることになった。

このような背景のもと、大学には、きめ細かく良質な教育や学習支援の提供による教育の高度化・多様化が求められている。大学がこの目標を達成するために、授業改善を始めとした教職員個々人の不断の努力に加え、大学の組織的教育支援を強化・推進している状況を可視化し、周囲にアピールできる手段が「いわゆるFD活動」であろう。FD活動の具体的な方策としては、お手本としての先行実施例が多い「学生による授業評価アンケート」が最も広く導入されている。

一方、FDを推進する切実さには大学間での相違が存在する。特に、国公立大学においては、2004年の法人化後、義務化された毎年の法人評価、さらに6年毎の教育・研究評価の結果が予算配分へと影響している。これら評価において、FDの実施という具体的評価項目は設定されていないが、教育の質保証に関わり、FD活動の具体的実施内容の可視化は必要不可欠であろう。また、私立大学においても、義務化された7年毎の大学認証評価において、FD活動の実施は評価結果に少なからぬ影響を与えている。国公立大学と異なり、現状では評価結果が私立大学補助金額に反映されるわけではないが、FD実施の必要度は増加している。

2. 愛知大学における授業評価アンケート導入の経緯

2000年度にFD委員会が設置され、最初に手掛けたFD活動は、学生による授業評価アンケートの全学での実施であった。FD委員会提案に対し各教授会が了承し、2001年度から学生による授業評価アンケートを、非常勤教員も含め全教員が実施することになった。ただし、最低1科目の実施をFD委員会が要望し、その際、結果を人事考課には使用しない旨の内容を含めた依頼状を、学長名で全教員に送付した。結果として、専任教員はほぼ85%、非常勤教員についても約60%が実施した。実際には、3年前(1998年)から教

務委員会が実施主体となり、授業評価アンケートを任意で実施していた。任意のため実施状況は学部により異なり、数%～40%の相違があった。

当初は、セメスター終了時1回の実施であったが、その後教員からの改善要望(学生の要望に直ぐに応える)により、セメスター中間と終了時の2回実施とした。さらに、質問項目も学部毎、科目毎に変更した。ところが事務処理が煩雑となったため、解消目的で2005年からWeb上での実施に変えたところ、学生の参加が激減し11.3%まで低下した。その結果、2007年度に申請した大学認証評価において、助言対象となった。これへの対応として、当時のFD委員会は以前の方法に戻すことを即決し、2008年度から再度アンケート用紙使用で実施している。さらに、セメスター中間での実施も希望する教員が減り、現状ではセメスター終了時の1回となった。

このように、2001年から既に12年間実施しているが、この間に、実施媒体や質問内容、実施方法等に変更を繰り返している。変更を行ってきた理由は、大学認証評価への対応という外圧や教員からの要望であるが、その際の変更内容に関する理論的根拠は乏しく、多くの場合は経験則に依拠してきた。

3. アンケート結果の分析と実施効果

本学のアンケート質問項目は4項目(理解度、集中度、興味・関心度、教材・資料適切度)と自由記述であり、教員独自の質問を2項目追加可能としている。結果はレーダーチャートで示している。アンケート用紙は、定期試験の成績提出後にレーダーチャートと共に各教員に返還し、教員からは、結果に対するコメントを提出させている。アンケート結果(レーダーチャートと教員が提出したコメント)は、学内のみであるがHPで公開している。アンケート結果へのアクセス件数は、2011年、2012年共毎月100件前後であり、少なからぬアクセスがあると言える。

結果の分析と実施効果測定、さらには結果の有効利用が、FD活動を推進し、教育の高度化・多様化を促進するFD委員会や大学に課せられた責務である。授業評価アンケートの理念や目的および目標を明確化し、それらを達成するためのデータ分析が求められている。方法論に関する議論は延々となされているが、どの大学でもデータ分析や効果測定については棚上げされているように見える。確かに、個々のデータは統計処理には不向きな要素を含んでおり、傾向は把握できても有意差などは判断できない。そのような状況から、データ分析ではなく、教員各自の自己評価材料と見なされ、つまりは各教員に対する授業改善要求の判断材料として結果が扱われ、教員の個人的努力が求められている。アンケート実施目的におけるミクロな視点からは、それでよいのであろう。しかしながら、全学的教育の高度化というマクロな視点からの課題抽出は、解決されていない。

報告者が行ったいくつかのデータ分析を示す(本報告書後半に記載した、フォーラム分科会の報告で使用したスライドNo.20～No.26)。アンケート回答における授業の理解度(学生が理解したと感じている程度)と定期試験の成績(教員が求める実質的理解の程度)との間には、必ずしも相関は存在しない。定期試験受験者全員がアンケート回答者ではないので、若干バイアスのかかったデータではあるが、多くの科目では一定程度の相関がみ

られる一方で、アンケート結果の理解度は高くても、試験の合格率は低い科目も相当数存在する。相関から外れている科目の多くは、多人数講義という特徴がみられる。また、スライド No.23 の結果からも、多人数授業の教育効果が課題とされ、カリキュラムの見直しも含めた多人数授業の解消が必要とされた。本学では、履修制限とクラス数の増加で解消を行い、解消後の効果についても、授業評価アンケート結果で確認した(スライド No.24)。

4. 学生による授業評価アンケートの課題と今後

大部分の大学に授業評価アンケートが導入された現在でも、その方法論が議論されている背景には、「学生の評価能力」に対する懸念が教員から払拭されていないことも一因であろう。信頼できる評価者による信頼できるデータであれば、データ分析や効果測定の結果に有意な解釈が可能と予測される。また、被評価者もそれらの結果に納得するであろう。

しかしながら、学生の評価能力とは一体何をもって判断すべきか。報告者は、アンケートの質問項目から考えて、むしろ「学生の学習意欲」を問題視すべきではないかと考えている。関連した結果として、本学ではスライド No.26 が示すように高学年ほど評価が高い傾向がみられ、これに関して本学 FD 委員会では様々な意見が出された。授業理解度の上昇が要因との意見が多数であったが、一方で、学習意欲の高い学生ほど評価が厳格であることも指摘された。

授業評価アンケートの結果は、決して完成されたツールではないにしても、多面的に観察し、さらに他の教学データとの連結による総合的な分析により、カリキュラムの体系性、学生の学習意欲、全学的な教育環境・施設整備等、教育改革につながる多くの課題が明らかとなる。たとえ少人数授業でも、教員個人では解決できない課題は存在する。そのような課題に大学内の各部局が組織的に対応することが、組織的 FD と解釈されるのではないか。個人の人事考課や授業運営能力の判断材料として利用するだけでなく、教育活動に対する組織的支援における課題発見材料と見なすことも可能であろう。

FD 活動として広く認識されている学生による授業評価アンケートを、効率よく効果的に継続実施するについて、授業評価アンケートの質問内容や結果分析の理論研究が必要であろう。報告者の所属大学も含め、多くの実施大学でマンネリ化と言われており、経験則だけではないエビデンスに基づく分析結果を基盤とした見直しが喫緊の課題である。

「組織的FDの義務化」が提唱された際、組織的 FD の解釈として、大学内にFD研究組織を立ち上げ、FDの理念・目的や方法論を専門に研究する人材の育成が提案され、実際にFD研究組織を設置した大学も少なくない。FD 活動に正解はない。正解はないから不断に考える。絶えず考え、絶えず学生を見つめることが FD 活動の原点であろう。もちろん、感覚的で混沌とした活動に、公式や共通項を見出し整理する作業は必要であり、その観点から FD 研究は重要な意味を持っている。しかしながら、行き過ぎた研究は FD 活動に正解を求めるであろうことが危惧される。

以下に、フォーラムの分科会報告で使用したスライドの一部改定版を掲載する。

大学コンソーシアム京都第18回FDフォーラム
2013年2月24日(於京都)

愛知大学
AICHI UNIVERSITY

第3分科会
学生による授業アンケートの現状と課題そして発展へ

授業評価アンケートとFD
教学担当副学長・FD委員長の経験を通して考える課題

愛知大学地域政策学部
功刀 由紀子

2013/2/24 1

大学当局にとってのFDとは？

FDの努力義務(1998年大学審議会答申)
組織的FDの義務化(2008年大学設置基準の一部改正)

とにかく実施し、その事実を学外にアピールする
もちろん、大学における教育の高度化、多様化は
不可欠であり、教職員個々人の不断の努力に加え、
大学による組織的教育支援の強化や推進が求めら
れている。

その過程や効果を可視化し、周囲にアピールできる
「わかりやすい」方策が「いわゆるFD活動」ではないか？

2013/2/24 2

当然、役職者は「号令をかける旗振り役である。」
とは言え・・・
強力にFDを進めることに抵抗がある。

↓

- 一教員として、役職者になったとたん、昨日までとは異なる態度を取りたくはない。
- 立場により意見を使い分けることへの呵責、葛藤
- 責任主体であることから発生する慎重論(あるいは消極論)。結果の有効利用方法に関する思惑
- 前任者との意見・方針の相違をどのように調整するか
- そもそも前任者の遺物はすべて否定されるのが通常？

2013/2/24 3

愛知大学
AICHI UNIVERSITY

FDを推進する切実さには大学間で相違がある

- * 国立大学(法人)と私立大学(法人)との相違
- ・義務化された法人評価、教育・研究評価の結果が、予算配分へ影響する。
- ・教育の質保証における評価指標として、授業評価アンケート結果の可視化、数値化(見せ方)は必要
- ・私立大学も大学認証評価の義務化により、必要度は上昇している。
- * 育成する人材に対する社会的評価(外圧)が明確な学部の存在・・・医・歯学部(医者の育成)、工学部(技術者の育成→JABEEの導入)、法科大学院等

2013/2/24 4

授業評価アンケートとFD

授業評価アンケートの実施⇒授業改善⇒FDの実施
そもそも「授業改善」と言うけれど、「良い授業」とは？

↓

そこが明確でないから、「授業改善」やFDと叫んでも、現実味や達成感が湧かない。たとえば、FD研修での永遠のテーマ(?)であった
「私語のない大人数講義の工夫」という課題に対して「教授技能の向上」という個人の努力義務に帰結させるのか？
個人の努力のみでは解決できない課題は、多数存在

2013/2/24 5

FD委員長としての方針決定

↓

アンケート結果から、組織的対応が必要な課題を見つけだすことを方針とする。

したがって、学内で開催したFDフォーラムの趣旨は、次のスライドに示すように

↓

2013/2/24 6

第12回 愛知大学FDフォーラム

(テーマ)
「無理せず、無駄なく、無茶もせず
— 学生、職員、教員のゆるやかな相互補完で
進める草の根からの教学改革」

年度初めのFDフォーラム、今回は、法政大学社会学部教授 大崎雄二氏にお話し
いただくこととなりました。
大崎氏は、法政大学にて社会学部FD委員会委員長を務められ、草の根からの
教育改革を推進するため「社会学部における学生参加型FDの展開」や「学生・教
員・職員一体型教学改革の実践」に取り組みおられます。そのご経験をもとに
、教育改革、とりわけ大学における「草の根からの教育改革」の実践例をご講演い
ただきます。わたしたち教職員にとって、貴重なご示唆をいただける機会となるで
しょう。皆さんのご参加をお待ちしています。
【日 時】2010年4月8日(木) 16:30~17:55
【会 場】愛知大学名古屋校舎 003教室
【講 師】大崎 雄二 氏(法政大学社会学部 教授)

7

愛知大学の紹介

- 大学本部; 豊橋市
- キャンパス; 名古屋校舎、車道校舎、豊橋校舎
- 学生数; 9,612人(2012年度、学部・短大)
196人(2012年度、大学院・専門職大学院)
- 教員数; 281人(本学卒業生はわずか)
- 職員; 148人(本学卒業生は45%を占める)
- 学部; 7学部9学科、短期大学部
- 大学院; 8研究科9専攻(専門職大学院含む)

8

本学での授業評価アンケート導入経緯

夜間部学生が自主的にアンケートを実施、結果を学生
新聞紙上で公開
昼間部学生会(学生の自治組織)もアンケートを始める。
これを受けて、教養部(当時)の一部教員が自主的実施。
質問項目等は東海大学に倣う。
→ 教務課が、昼間部学生会主導でのアンケート実施
継続を依頼したところ、学生会が辞退(責任を持ちたくない)。
→ 結果として、一部教員による自主的実施が存続、
教務課は実務協力をする(1998年~)。

9

全学での実施は2001年から

2000年; FD委員会設置
2001年; 全学での実施が始まる。
(実施における原則)
各教員最低1科目実施、結果の公表は学内のみ
公表非公表は教授会毎に決定する
教員評価(人事考課)のデータとしない
2002年以降現在に至るまで
実施媒体
実施時期
データ処理
質問項目の内容

10

授業アンケートの実施媒体、質問項目等の変遷

	実施時期	実施媒体	実施主体	質問項目
2001	Semester 終了時	質問用紙	FD委員会	全科目共通
2002~ 2003	Semester 終了時	質問用紙	FD委員会	外国語とその他講義 科目で異なる
2004	Semester 中間 終了時	質問用紙	FD委員会	各学部の講義科目と演 習科目、学部固有科目 と共通教育科目、諸課 程科目で異なる
	Semester 中随時	質問用紙	随時の場合は、実施 およびデータ処理は 各自実施	
2005~ 2007	Semester 中間 終了時	Web利用	FD委員会	各学部の講義科目と演 習科目、学部固有科目 と共通教育科目、諸課 程科目で異なる
2008~ 2012	Semester 終了時	質問用紙	FD委員会	全科目共通

11

2008年度以降使用している質問項目

質問項目

1. 授業内容を理解できた。
2. 授業に専念できた。
3. 授業を受け、興味・関心が広がった。
4. 教材・資料等は適切であった。

[総合評価]
この授業を履修して、よかったです
と思いますか。



12

愛知大学
AICHI UNIVERSITY

2002年度春学期「学生による授業評価」アンケート設問（外国語以外）

このアンケートは、あなたが受講した各講義を担当しているあなたの所属な専任を講師として、今後の履修内容や授業内容の改善に役立てることを目的としています。回答内容は厳密に保守され、第三者に開示されませんので、自由に答えてください。

問1から問16について、次の5から1までの選択肢のうちあなたの考えにもっとも近いものを選び、授業評価の該当する欄にマークしてください。問1は①～④の中から3つ以内をマークしてください。

その通り 大抵その通り どちらともいえない やや違う 違う

問1 この授業によって、新しい知識の考え方を身につけることができました。

問2 この授業によって、基礎的な知識の理解が深まりました。

問3 この授業によって、自分が専門に成長したことを実感できました。

問4 この授業の授業内容の理解が容易で良かったです。

問5 プリント資料、資料、配布資料はこの授業の理解を助けた。

問6 この授業の授業内容の理解が容易で良かったです。

問7 この授業の担当者は、学生にやさしい授業を行った。

問8 この授業の担当者は、学生の質問や意見に丁寧に答えた。

問9 この授業の担当者は、学生の理解を促すような授業内容や方法を講義のために使った。

問10 この授業の担当者は、講義内容に対する高度な理解を示した。

問11 この授業は履修する上で必要不可欠な知識や技術を身につけた。

問12 この授業は履修科目の総論や専門知識の理解を深めたり、シラバス通り計画的に進められた。

問13 あなたはこの授業に満足している。履修のつもりである。

問14 この授業の履修が目的だったので、他の学生に推薦したいと思う。

問15 問16は、授業評価の際に問1に答えなくてもいい（他の履修の）。

問16

問17 あなたがこの授業を履修した理由を次の5つ以内で答えてください。

①「履修科目の必修」で履修を迫られた
②履修内容が興味があった
③履修内容が面白かった
④履修の必要性があった
⑤履修内容が自分の将来に役立つと思った
⑥その他（履修科目の履修を促された）

問18から問19は自由記述欄に入力してください。

問18 この授業はどの点が良かったと思いますか。

問19 この授業はどの点が改善が必要かおっしゃいますか。

問20 この授業について、今後履修してほしい点があれば教えてください。

13

愛知大学
AICHI UNIVERSITY

2002年度春学期「学生による授業評価」アンケート設問（外国語）

このアンケートは、あなたが受講した各講義を担当しているあなたの所属な専任を講師として、今後の履修内容や授業内容の改善に役立てることを目的としています。回答内容は厳密に保守され、第三者に開示されませんので、自由に答えてください。

問1から問16について、次の5から1までの選択肢のうちあなたの考えにもっとも近いものを選び、授業評価の該当する欄にマークしてください。問1は①～④の中から3つ以内をマークしてください。

その通り 大抵その通り どちらともいえない やや違う 違う

問1 この授業によって、新しい知識の考え方を身につけることができました。

問2 この授業によって、基礎的な知識の理解が深まりました。

問3 この授業によって、自分が専門に成長したことを実感できました。

問4 この授業の授業内容の理解が容易で良かったです。

問5 プリント資料、資料、配布資料はこの授業の理解を助けた。

問6 この授業の授業内容の理解が容易で良かったです。

問7 この授業の担当者は、学生にやさしい授業を行った。

問8 この授業の担当者は、学生の質問や意見に丁寧に答えた。

問9 この授業の担当者は、学生の理解を促すような授業内容や方法を講義のために使った。

問10 この授業の担当者は、講義内容に対する高度な理解を示した。

問11 この授業は履修する上で必要不可欠な知識や技術を身につけた。

問12 この授業は履修科目の総論や専門知識の理解を深めたり、シラバス通り計画的に進められた。

問13 あなたはこの授業に満足している。履修のつもりである。

問14 この授業の履修が目的だったので、他の学生に推薦したいと思う。

問15 問16は、授業評価の際に問1に答えなくてもいい（他の履修の）。

問16

問17 あなたがこの授業を履修した理由を次の5つ以内で答えてください。

①「履修科目の必修」で履修を迫られた
②履修内容が興味があった
③履修内容が面白かった
④履修の必要性があった
⑤履修内容が自分の将来に役立つと思った
⑥その他（履修科目の履修を促された）

問18から問19は自由記述欄に入力してください。

問18 この授業はどの点が良かったと思いますか。

問19 この授業はどの点が改善が必要かおっしゃいますか。

問20 この授業について、今後履修してほしい点があれば教えてください。

14

2004年度変更の質問項目

1. 学生の属性
学部、学年
2. 学生の自己評価項目
出席回数、予習・復習・事前準備等
3. 授業を履修して感じた点；複数選択肢
たとえば、文学部講義科目では
他者に対する理解や教員が深まった
社会について関心が深まった等々
4. 授業について、良かった点、要望点；複数選択肢
たとえば、文学部講義科目では
授業の構成や流れがよくできていた
身近な具体例などが理解を助けた
学生の反応を見ながらペースを考え授業を進めてくれた等々
5. 授業を履修して良かったと思うか
6. 自由記述欄

問3、4の選択肢の内容を各学部や科目ごとに変更した。

15

愛知大学
AICHI UNIVERSITY

教員実施率の経年変化

16

愛知大学
AICHI UNIVERSITY

学生による授業評価

結果公表のログイン画面

2001年度 秋学期	2007年度 春学期
2002年度 春学期	2007年度 秋学期
2002年度 秋学期	2008年度 春学期
2003年度 春学期	2008年度 秋学期
2003年度 秋学期	2009年度 春学期
2004年度 春学期	2009年度 秋学期
2004年度 秋学期	2010年度 春学期
2005年度 春学期	2010年度 秋学期
2005年度 秋学期	2011年度 春学期
2006年度 春学期	2011年度 秋学期
2006年度 秋学期	2012年度 春学期

17

愛知大学
AICHI UNIVERSITY

結果公表のログイン画面

① アンケート結果の公表・非公表の扱い（印をつけてください。）

② 発表の理由

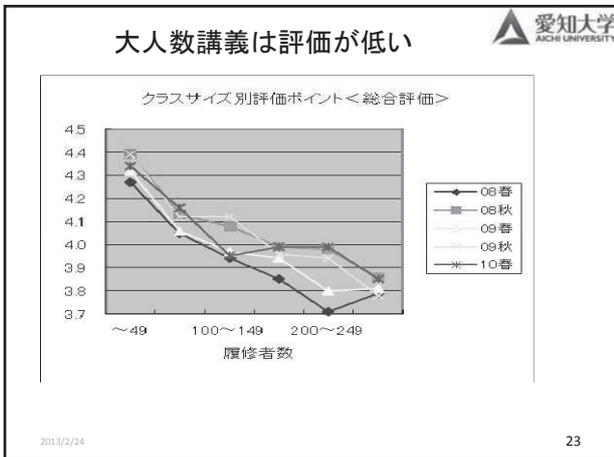
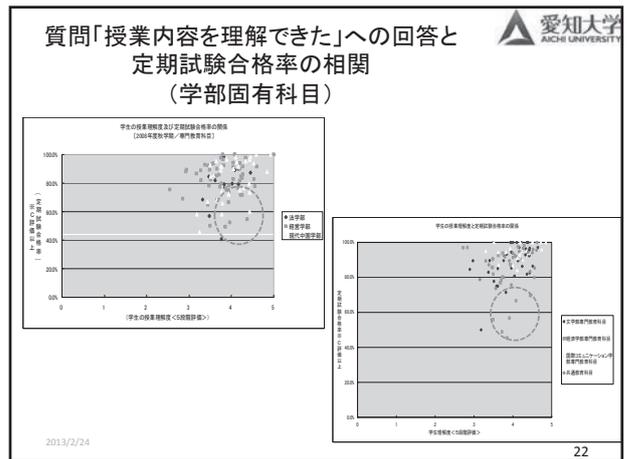
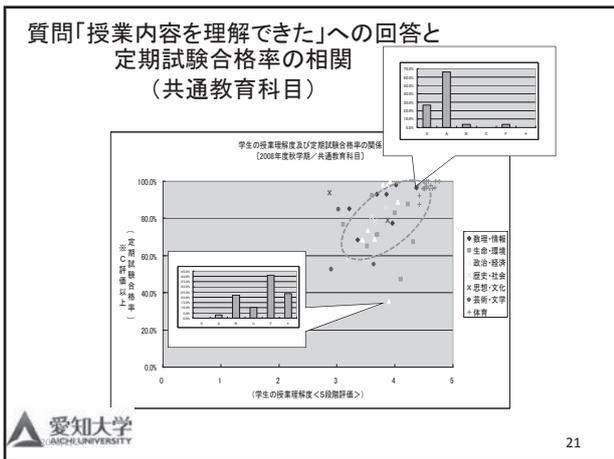
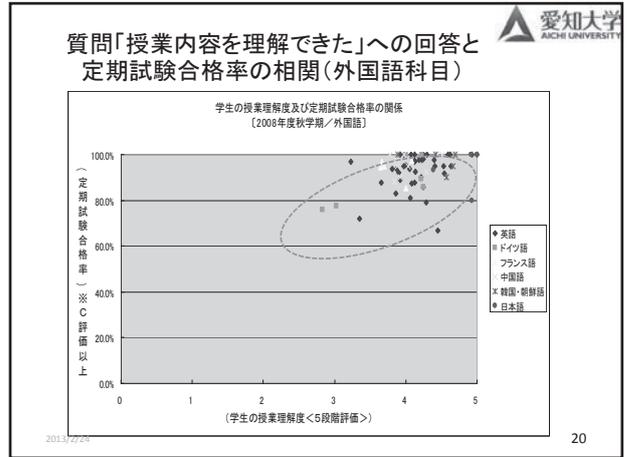
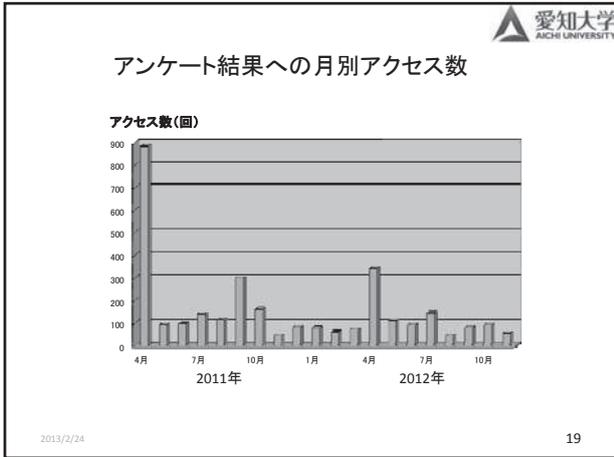
③ 結果に対する分析及び評価

④ 今後改善すべき点

現状では、実施教員全員が公表している。

教員からのコメント回収率は約55%

18



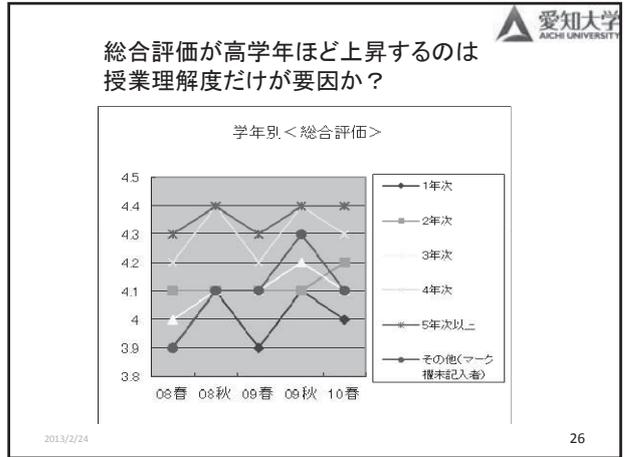
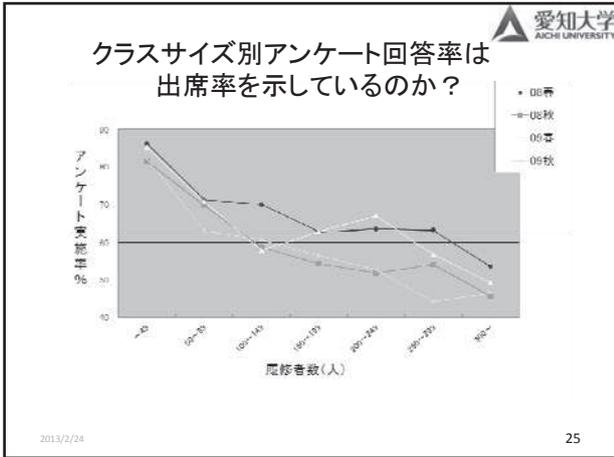
クラスサイズ変化による効果

科目No	履修者数			09年度春学期					10年度春学期				
	09年度春学期	10年度春学期	08年度春学期	履修者数	理解度	合格率	理解度	合格率	理解度	合格率	理解度	合格率	
1	504	201	303	3.9	3.6	3.5	3.8	4.0	4.4	4.2	4.2	4.4	4.5
2	504	206	296	3.9	3.6	3.5	3.8	4.0	4.4	4.2	4.2	4.4	4.5
3	490	206	294	4.2	3.9	4.1	4.0	4.3	4.2	3.9	4.1	4.1	4.4
4	410	210	200	4.4	4.2	4.6	4.5	4.6	4.5	4.4	4.7	4.6	4.8
5	320	208	112	3.2	3.3	3.1	3.3	3.2	3.5	3.5	3.5	3.6	3.6
6	297	211	86	3.4	3.2	3.4	3.7	3.7	3.6	3.5	3.7	4.1	4.1
7	282	201	81	3.3	3.3	3.3	3.5	3.5	3.5	3.3	3.5	3.7	3.7
8	249	203	46	3.9	4.0	3.8	4.0	3.9	4.1	4.1	4.0	4.1	4.1
9	246	203	43	3.8	3.6	3.9	4.0	4.1	3.8	3.6	3.9	3.7	3.8
10	246	205	41	3.4	3.4	3.6	3.3	3.9	3.3	3.7	3.6	3.5	3.8
11	247	208	39	3.3	3.6	3.7	3.9	3.9	3.3	3.6	3.8	3.7	3.9
12	225	211	14	3.9	3.8	3.9	3.9	4.0	4.1	4.1	4.1	4.1	4.2

1 平均値(全科目) 3.72 3.65 3.76 3.81 3.85 3.89 3.84 3.94 4.02 4.12
平均値の差 0.18 0.22 0.19 0.21 0.18

2 平均値(履修50名以上) 3.76 3.69 3.73 3.80 3.80 4.01 3.86 3.90 4.18 4.28
平均値の差 0.28 0.27 0.28 0.30 0.30

2013/2/24 24



再度、授業評価アンケートとFD

組織的FDとは？

- * 全学的な教育環境・施設整備、体系的カリキュラムの構築、学習支援等、教員個人では解決できない教育改革課題に大学内の各部署が組織的に協働し解決すること。
- * 学生による授業評価アンケートの結果は、課題を明確にするデータとして利用可能であろう。
- * しかし、データとしてのアンケート結果分析は不十分な状況であり、研究開発が望まれる。
- * アンケート結果の理論的分析は、FD活動のエビデンスとして有効利用可能となる。

2013/2/24 27

授業評価アンケートとFDにもう一言

- 大学教育を取り巻く環境の多様化に即して、学生アンケートによる授業評価システムの見直しと日本の大学に適した再構築が必要であろう。
- 一方で、FD研究組織を設置し、FDの理念・目的や方法論の研究者育成も必要であろうが、FD研究の過度な推進には疑問が生ずる。
- 在任中、「最大のFDは採用人事」を標榜した。自前で教員養成できない弱小私立大学にとっては重要な課題である。

2013/2/24 28

ご清聴ありがとうございました。

2013/2/24 29

学生による授業アンケートと教育改善 PDCA サイクル

東北大学 高等教育開発推進センター 副センター長 教授

関内 隆

学生による授業アンケートと 教育改善PDCAサイクル

東北大学高等教育開発推進センター
関内 隆

第18回FDフォーラム第3分科会
学生による授業アンケートの現状と課題そして発展へ
2013年2月24日

報告の構成

- I はじめに
- II 授業アンケートに関する調査結果
- III 授業アンケート活用とPDCAサイクル
- IV 東北大学全学教育のPDCAサイクル
- V おわりに - 現状と展望

I-1 はじめに

- 学生による授業アンケートをめぐる問題:
 - ・アンケートをどのような方法で有効かつ公正に実施するか
 - ・アンケートの項目において、どのような設問を立てるか
 - ・アンケート結果を如何にして各教員の授業改善に結びつけるか
 - ・結果をどのようにして組織的に活用し、教育の質向上をもたらすか
 - ・そもそも、アンケートを実施する目的は何か、等々
- 現状と課題、展望を探るため、東北地域の大学を対象として2008年末に調査を実施
- 関内隆・羽田貴史・葛生政則・板橋孝幸『「学生による授業評価」の現状と課題—東北地区の実施状況調査を踏まえて—』『東北大学高等教育開発推進センター紀要』第4号(2009年3月)

I-2 はじめに

- 「学生による授業評価」アンケート等に関する調査
- 2008年11月28日に東北地域の大学、48大学に送付
なお、HP上にも回答票ファイルを提示
- 29大学から回答(国立:6、公立:8、私立:15) 回収率:60.4%
- 調査項目:
 - ①「学生による授業評価」の名称 ②授業評価の対象と実施方法
 - ③共通教育における開始時期 ④実施方法等の近年の修正点
 - ⑤実施責任体制 ⑥実施方法ならびに授業評価アンケート項目
 - ⑦授業評価の目的 ⑧授業評価の活用方法
 - ⑨授業評価以外の形成的評価 ⑩各大学における特徴
 - ⑪各大学の検討課題
- * 大学名公表の諾否

I-3 はじめに

- 調査結果から見えて来た授業アンケートをめぐる現況は何か?
- 授業アンケートの結果をどのように活用するかについて各大学が試行錯誤している段階
 - アンケートデータから何を読み解き、そこから授業改善・教育改革を如何に図っていくかを模索している状況
 - 東北地域の各大学の事例と東北大学全学教育での取り組みを報告
 - PDCAサイクルという視点から、授業アンケートの実施と活用が真のFDとなるための展望を探る
 - 東北大学高等教育開発推進センター編『学生による授業評価の現在』(東北大学出版会、2010年3月)

II-1 授業アンケート調査結果(1)実施状況

- 授業アンケートの名称
 - ・実施目的と関連:「学生による」「授業改善」「教育改善」等の文言付加
- 授業アンケート実施方法・体制等と近年の修正点
 - ・実施の対象及び方法:ほとんどの大学で共通(教養)教育、学部専門教育においても全学共通で実施
 - ・実施の開始時期:2001~5年度開始が過半
 - ・実施方法・体制の修正:9割近くの大学が修正
 - ①アンケート項目(72%):項目数の追加傾向。削減(弘前大学等)も
 - ②実施体制(31%):実施主体の変更、アンケート回収方法の変更
 - ③公表の対象と方法(21%):授業名・授業者名の公表(山形大学等)
 - ④結果の活用方法(17%):授業実践記録(東北大学)、優秀科目選出(岩手大学)など
- 授業アンケートの実施体制:
 - ・実施責任者は6割が委員会、分析体制も委員会が中心

II-2 授業アンケート調査結果(2)質問項目

- アンケート用紙の提供を受けた23大学の状況
 - ・項目総数(回答者属性を除く)は6~36項目で、平均は18項目程度
- 多くの大学が採用している項目
 - 「授業内容」: 授業の系統性、シラバスとの整合性等で、ほぼ全大学
 - 「授業方法」: 説明の仕方、板書、学生とのコミュニケーション、視聴覚教材等の設問で、各大学とも最多の項目
 - 「学生の予習復習、主体性等の自己評価」: ほぼ全大学で多くの項目
 - 「満足度」: 総合評価の一つとして設定
- 約半数の大学が採用している項目
 - 「授業目標・目的の明確化」「有益性」「教員の熱意」「理解度・達成度」
 - 「良かった点・改善すべき点」: 自由記述として
- 3割程度の大学が採用している項目
 - 「成績評価の基準と評価方法の明示」「授業環境」
 - 「履修理由」: 選択制あるいは自由記述

II-3 授業アンケート調査結果(3)実施方法等

- 授業評価実施の方法
 - ・毎セメスターに実施(83%)、各セメスターの試験前実施(72%)で無記名(68%)、全クラス対象(62%)が大勢
 - ・アンケート回収方法: 教員、学生、職員による回収と多様
 - ・特色ある方法: ウェブ入力(会津大学)、携帯電話で中間期にも実施(青森大学)、事務職員の配布・回収(青森公立大学、福島学院大学)など
- アンケート結果の公表形態
 - ・全大学で担当教員に行い、学生への公表は全体の過半
 - ・個別授業科目の担当以外の教員への公表は3分の2弱

II-4 授業アンケート調査結果(4)結果の活用

- 授業アンケート結果の活用
 - ・教員表彰の資料として5大学、教員評価に活用は3大学と少ない
 - ・岩手大学、山形大学の教員表彰事例、福島学院大学の資源配分を伴う教員評価など
 - ・公開授業の教員選任資料(宮城教育大学、東北文化学園大学など)
- 授業アンケート以外の「形成的評価」取り組み
 - ・多くの大学でレスポンスカードやミニットペーパー等を活用
 - ・セメスター中間期での授業評価アンケートの実施(秋田大学、青森大学等)
 - ・公開授業や授業検討会による授業改善活動の展開

II-5 授業アンケート調査結果(5)目的とPDCA

- 授業アンケートの目的とPDCAサイクル
 - ・授業アンケートの目的として、全大学で授業改善を促す個々の担当教員レベルのPDCAサイクルに活用
 - ・組織レベルのPDCAサイクルを目的に掲げる大学は55%
 - ①教員が授業改善案や改善レポートを公表(宮城大学等)
 - ②教員による授業評価アンケート実施(山形大学等)
 - ③ウェブ活用による双方向性の掲示板(会津大学)
 - ④集計結果を講座単位や委員会で検討(宮城教育大学等)
 - ⑤授業実践記録作成と科目委員会での検討(東北大学)
 - ・組織的なサイクルの実施責任者は、委員会中心の同僚制に基づく改革

III-1 授業アンケート活用とPDCAサイクル

- FDの2類型と相補性
 - (1)プログラム提供型FD
 - ・授業設計ワークショップ、講演会、公開授業・授業検討会
 - ・授業改善チップス、優れた(あるいはNG)授業実践事例の紹介(紙媒体、ウェブ)
 - ⇒ 教員の多様なニーズに応えるプログラム、各大学共通課題への汎用性あるFDとして展開
 - ・ここにおいて教員は研修プログラム、配布マニュアル等を受講する客体

III-2 授業アンケート活用とPDCAサイクル

- FDの2類型と相補性
 - (2)課題解決志向のOJT(On-the-Job Training)型FD
 - ・教員は単なる研修「客体」ではなく、継続的な授業担当に基づく教育改善推進の「主体」である
 - ・「省察的实践家」としての教員に期待
 - ・授業担当教員会議などの活用: 教員が抱える具体的課題から出発、課題解決の共有化、下からの組織的なカリキュラム改善へ
 - ⇒ 各大学独自のPDCAサイクルの推進

Ⅲ-3 授業アンケート活用とPDCAサイクル

- 東北大学全学教育におけるFDの取り組み
- (1)プログラム提供型FD:
 - ・全学教育FD(毎年3月)・基礎ゼミFD・ワークショップ(毎年11月)
 - ・授業設計(シラバス・成績評価等)のFD・ワークショップ
学生やTAも参加。分科会として科目委員会FD実施
 - ・授業設計マニュアル、PDブックレット、基礎ゼミ実践事例集(冊子、DVD、ウェブ版)など
 - ・各種の講演会(高等教育フォーラム、教育関係共同利用拠点によるPDプログラム、高等教育関係の国際セミナーなど)開催と成果報告書の公表

Ⅲ-4 授業アンケート活用とPDCAサイクル

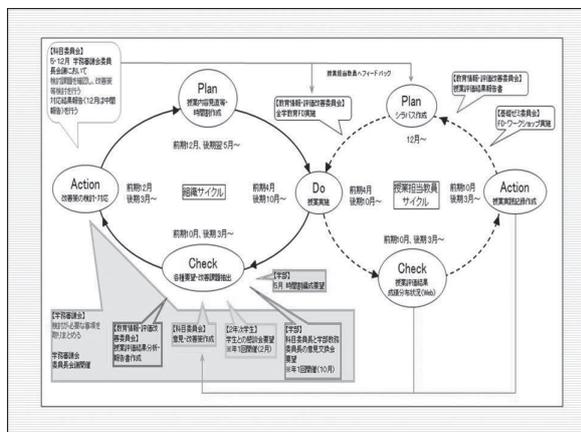
- 東北大学全学教育におけるFDの取り組み
- (2)課題解決志向のOJT型FD:
 - ・全学教育PDCAサイクルとして展開
 - ・各授業担当教員レベル・科目委員会等の組織レベルの2重のPDCAサイクル
 - ・プログラム提供型FDとの相補性を志向しつつ実施
 - ・個別の授業改善から科目カリキュラムの改革を志向: 教員による授業実践記録の作成
 - ⇒ 科目担当教員会議FD
 - ⇒ 学生との懇談会
 - ⇒ 各学部との意見交換
 - ⇒ 個別授業の改善とともにカリキュラム改善へ

Ⅳ-1 東北大学全学教育のPDCAサイクル

- 東北大学全学教育の実施運営体制
- (1)学務審議会:全学教育の企画・実施運営組織
 - ・教育担当理事が委員長、各部署の教務委員長を中心に構成:全学から36名の委員
 - ・高等教育開発推進センターが支援組織として関与:センター教員5名が委員、基幹となる委員会の委員長を務める
- (2)学務審議会のもとに各種委員会を配置
 - ・教務委員会、教育情報・評価改善委員会等
 - ・15の科目委員会(基幹科目、人文科学、社会科学、数学、物理学、化学、生物学、宇宙地球科学、実験科目、外国語、基礎ゼミ、情報基礎、保健体育、総合科目、カレントトピックス):約1700の授業クラス
 - ・科目委員会の委員長を学務審議会委員が務め、数名の授業担当教員を専門委員として配置、外国語には部会を設置。6~20名前後
- (3)授業担当は全学協力支援体制のもとで実施:約700名の教員が担当

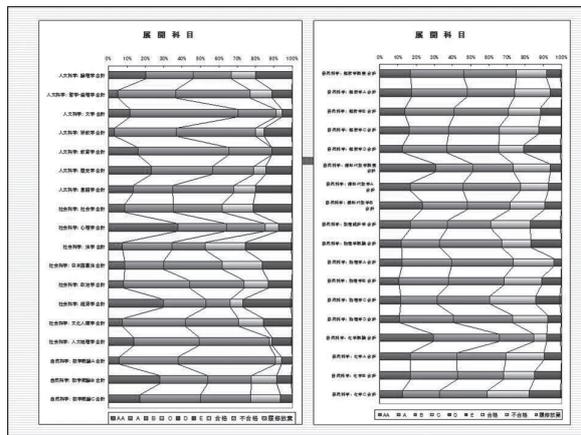
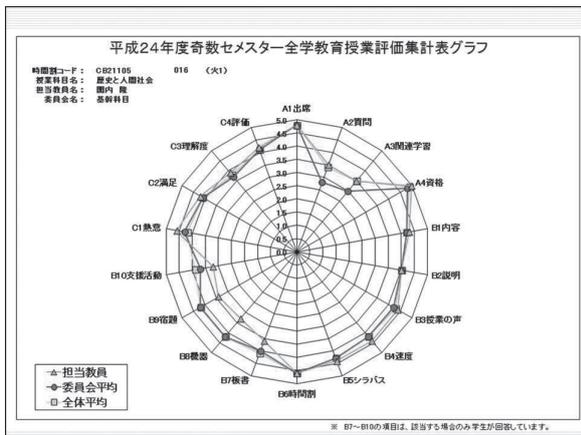
Ⅳ-2 東北大学全学教育のPDCAサイクル

- 全学教育を担当する教員レベルのPDCAサイクル
- (1)PLAN:
 - 担当教員は授業設計を行い、シラバスを作成(前年度の12~1月)
 - ← 授業設計マニュアル配布
 - ← 毎年11月に基礎ゼミ・FDワークショップ開催
 - ← 毎年3月末に全学教育FD(専任・非常勤対象)開催
 - ← 教育情報・評価改善委員会が前セマスタの授業評価結果報告書を公表
 - ← 継続的な授業担当教員は、前セマスタの授業評価アンケート結果や授業実践記録を踏まえる
- (2)DO:当該年度各セマスタの授業実践



Ⅳ-3 東北大学全学教育のPDCAサイクル

- 全学教育を担当する教員レベルのPDCAサイクル
- (3)CHECK:「学生による授業評価アンケート」結果と教育実践成果としての成績評価等を点検
 - ← アンケート結果を各教員へフィードバック(資料参照)
 - ← 科目毎の成績分布状況を公開(資料参照)
- (4)ACTION:授業実践記録の作成による成果確認と改善すべき点の把握、そして改善点等の次セマスタへ反映へ
 - 授業実践記録:ウェブ上のフォーマットに記入する方式
 - その構成:①学習の到達目標、②授業における工夫点、③授業評価結果の分析、④成績評価の状況、⑤今後の改善策や科目委員会への要望等(資料参照)



授業実践記録作成画面

授業実践記録作成画面のスクリーンショット。左側には授業実践記録の作成手順が示されており、右側には授業実践記録の作成画面が表示されています。画面には授業実践記録の作成に必要な項目が示されており、授業実践記録の作成が完了した際の確認画面も表示されています。

【授業実践記録作成】

1. 授業科目の目的・到達目標の学習目標設定
The purpose of the course (goals and objectives) written in the syllabus, etc. should be clearly stated in the syllabus. The purpose of the course (goals and objectives) written in the syllabus, etc. should be clearly stated in the syllabus.

2. 授業実践の目的・到達目標の学習目標設定
Points in educational contents and approaches you have elaborated in order to achieve the achievements in teaching of the course should be clearly stated in the syllabus. The purpose of the course (goals and objectives) written in the syllabus, etc. should be clearly stated in the syllabus.

3. 学生による授業実践の振り返りや授業実践に関するコメント
Summary and analysis of the results of Student Evaluation, and comments on the course should be clearly stated in the syllabus. The purpose of the course (goals and objectives) written in the syllabus, etc. should be clearly stated in the syllabus.

4. 授業実践の振り返りや授業実践に関するコメント
Summary and analysis of the results of Student Evaluation, and comments on the course should be clearly stated in the syllabus. The purpose of the course (goals and objectives) written in the syllabus, etc. should be clearly stated in the syllabus.

5. 授業実践の振り返りや授業実践に関するコメント
Summary and analysis of the results of Student Evaluation, and comments on the course should be clearly stated in the syllabus. The purpose of the course (goals and objectives) written in the syllabus, etc. should be clearly stated in the syllabus.

6. 授業実践の振り返りや授業実践に関するコメント
Summary and analysis of the results of Student Evaluation, and comments on the course should be clearly stated in the syllabus. The purpose of the course (goals and objectives) written in the syllabus, etc. should be clearly stated in the syllabus.

7. 授業実践の振り返りや授業実践に関するコメント
Summary and analysis of the results of Student Evaluation, and comments on the course should be clearly stated in the syllabus. The purpose of the course (goals and objectives) written in the syllabus, etc. should be clearly stated in the syllabus.

IV-4 東北大学全学教育のPDCAサイクル

□ 教員レベルのサイクルを科目委員会レベルで統括

- 授業評価アンケート結果、授業実践記録等を科目毎に委員会が集約
 - 科目委員会委員長は、科目全体の授業評価アンケート結果と成績評価状況、授業実践記録に出された各教員の意見等を取りまとめる
 - それに加えて、学生との懇談会や各学部教務委員会からの要望等を踏まえ、科目固有の共通課題を抽出
 - 委員会としての検討結果を「意見・改善案」に「対応計画スケジュール」等に作成して学務審議会に提出
- 科目委員会毎の担当教員会議FDの開催
 - 解決すべき共通課題の例: 受講生の学力レベルと授業内容、高校での学習状況・未履修問題、クラス編成のあり方、成績評価の公平性確保など
 - また、授業担当教員会議FDでは課題の確認とともに、工夫した授業実践の報告等を通して優れた授業実践例の共有化

IV-5 東北大学全学教育のPDCAサイクル

□ 科目委員会等レベルのPDCAサイクル

- PLAN: 検討課題の確認・改善策検討開始 (前年度12月～、5月～)
- DO: 当該年度前期・後期 semester の授業実践
- CHECK: 各種要望・改善課題の抽出
 - 科目委員会: 意見・改善案、対応計画等の検討・作成 (11月、3月)
 - 授業実践記録、授業評価結果、成績分布状況など
 - 全学教育に関する2年次学生との懇談会 (毎年2月に開催)
 - 学務審議会委員長、教務委員長、評価改善委員長等と各学部推薦学生との間でカリキュラム等に関する懇談会
 - 科目委員長と学部教務委員長との懇談会 (毎年10月に開催)
 - なお、5月には事前に全学教育科目に関する学部意見を聴取
- ACTION: 学務審議会委員長会議 (12月、翌年度5月)
 - 検討課題の確認と課題対応に関する結果の中間・最終報告
 - 時間割編成への反映、授業内容の見直し等

IV-6 東北大学全学教育のPDCAサイクル

□ 学務審議会全体の年間PDCAサイクル

- (1) 4～6月:
- 5月学務審議会委員長会議FD: 前年度からの引継ぎ事項等を確認
 - ① 2月に実施された学生との懇談会で出された要望、3月に取りまとめられた各科目委員会の検討課題を新年度当初に確認
 - ② 前年度になされた検討課題の対応成果について共有化
 - 科目委員会: 検討課題の改善策検討、対応策を後期セメスター実施、さらに次年度時間割等に反映
 - 教育情報・評価改善委員会: 前年度後期セメスターの授業評価結果報告書発行、全学教育FD(3月実施)報告書の発行
- (2) 7～9月:
- 教務委員会: 次年度時間割編成作業
 - 各科目委員会、各学部からの意見を反映

IV-7 東北大学全学教育のPDCAサイクル

(3) 10～12月:

- 教務委員会: 10月に科目委員長と学部教務委員長との懇談会を開催
全学教育科目全体への要望を直接聴取
 - 基礎ゼミ委員会: 11月に基礎ゼミFD・ワークショップの実施
 - 科目委員会: 前期授業実践記録、授業評価結果等の取り纏め
授業担当教員会議の開催、意見・改善案等の作成
 - 12月学務審議会委員長会議: 新たな課題の確認、対応結果中間報告
 - 教育情報・評価改善委員会: 前期セメスターの授業評価結果報告書
- (4) 1～3月:
- 教務委員会: 2月に2次学生との懇談会、学生の要望事項を集約
 - 教育情報・評価改善委員会: 3月に全学教育FDの実施
 - 科目委員会: 後期授業実践記録、授業評価結果等の取り纏め
科目委員会FD(教員会議)開催、意見・改善案作成

IV-8 東北大学全学教育のPDCAサイクル

□ 成果

- (1) 授業担当教員レベルと組織レベルのPDCAサイクルの連動性
- 授業評価アンケートの組織的な活用: 授業実践記録など
 - 科目委員会の活発な活動成果: 授業内容、クラス編成の変更など
- (2) 全学教育のOJT型FDとして一定の機能
- 大学教員の研究と教育を対立的に捉えず、研究と教育のシナジー効果を発揮するために、教員が担当する授業の具体的な課題から出発
 - 教員は自らの授業実践について一言を持つ。それを適切に組織化
 - 教員の教育意欲・改善達成感等をバネに、個別授業の改善からカリキュラムの改革へ
- 課題と展望
- (1) FD2類型の相補性をさらに高め、プログラム型FDの精緻化、位置づけ明確化
- (2) 科目委員会活動について、教育向上への熱心さに関する格差の是正
- (3) 全学教育のPDCAサイクルが各学部へ波及・展開することを期待

V-1 おわりに — 現状と展望

□ 東北大学での授業評価アンケートをめぐる現状と課題:

- (1) アンケートの結果を意義あるデータに加工し、如何にして教員が有益に活用できるようフィードバックするか
- (2) アンケート調査の項目について、学生の学習状況を的確に把握する視点に照らして設問間の関連性は適切か、整理統合の必要はないか等に関する検討
- (3) 無記名式から記名式アンケートへの転換を検討。成績なども含めた学習の成果等に関する追跡調査研究の資料的な基盤作りへ

V-2 おわりに — 現状と展望

□ 授業アンケート実施の目的・機能を明確にすることの必要性

- (1) 授業評価アンケートは教育活動業績評価の側面(総合的評価)とともに、授業改善につなげるための手段の側面(形成的評価)の2つの機能を持つ
- (2) 教員個人の教育活動評価に際してのアンケート結果活用などの問題へのスタンス
- (3) 大学はその使命等に応じて、授業アンケートの実施にどのような役割・機能を持たせるかを具体的に明確にする必要あり

V-3 おわりに — 現状と展望

□ 授業アンケートとPDCAサイクルの連携:

- 授業アンケート単体ではなく、教育の成果としての成績評価、さらにはカリキュラム全体等、教育をめぐる多様な情報を多面的に把握し、組織的に集約することが不可欠
- 学生からの意見要望、授業担当教員からの意見、大学内の関係部局等から要望を適切に把握し、如何にマネジメントするかという視点の重要性 = PDCAサイクル
- 「省察的実践家」としての大学教員への信頼を基礎に
- 「責任ある評価力」という社会的基礎力をもつ学生の育成

「授業アンケート」が悪者なのか

九州大学 基幹教育院 教育企画開発部 准教授

田中 岳

1. 報告（キーメッセージ）

授業アンケートの実施について、マネジメント（進行管理）する側が現場で発しているはずだろう素朴な問いかけを本報告の起点としました。あわせて、それらの問題点が解決すれば授業アンケートが良いものになるのだろうかという疑問も投げかけ、授業アンケートについて考える視点をマインドマップに表現し、課題の提起を試みました。しかしながら、そうした整理は新たな葛藤を呼び起こします。それは、どのような時代背景や社会状況のもとに授業アンケートがある（あった）のだろうか、というものです。授業アンケートが何を背負っているのだろうかとも換言できるでしょう。

本報告では、大学教育における「学生」の捉え方が変化していること、すなわち、消費者から学習者へとシフトしていることに着目し、授業アンケートはそうした動向を見据えて再配置される必要があると提案したところです。かつては満足度の時代にあった授業アンケートを、学習成果（質保証）の時代に再表現することが実施者に求められているともいえます。また、それらのトレンドは、カリキュラムやキャンパスにおける学生の成長について可視化することへの関わりも求めるはずで、授業アンケートを、個別の授業（教師と学生との生成的な営み）と結びつけておくだけに留めるのは、難しくなっていくのかもしれない。

2. 午後のサブルームでは（参加者と考えたこと）

これからの授業アンケートを考えてみたい参加者の皆さんが多く集まったように見受けられました。午前では詳細に説明できなかった「マインドマップ」について解説するところから午後の検討が開始され、以下のような事項が共有されました。

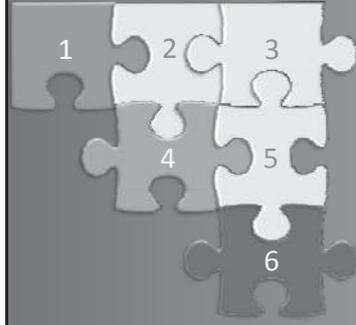
- 大学が置かれている状況によって、あるいは授業科目の特性に応じて、「学生」を消費者として見なすのか、また学習者に見立てるのかといった見極め（満足度と学習成果の質問項目バランス）が、授業アンケートの設計者・実施者に求められる。
- 多様なアセスメントと支援プログラムの提供が重要になる。
- ラーニングアウトカムが求められる時代を見据えての先行した試みは大切だろう。
- いわゆる教学 IR との連動について考えてみる必要がある。

3. 全体討議へ（所感）

『未来の学生のために』と会場からの質問（授業アンケートは誰のため？）に回答したところです。授業アンケートが、事後の検証になることは避けられないものの、生成的にも活用するスタンスが授業アンケートの設計者・回答者・実施者・管理者に求められていると再考した分科会でした。

※次頁より当日配付の資料（ppt ハンドアウト、マインドマップ）を掲載します。

報告3
「授業アンケート」が悪者なのか
 田中 岳
 (九州大学 基幹教育院 教育企画開発部)



597大学
 (約80%:平成20年度)

- ▼ 全学的な学生による授業評価を実施している。
- ▼ 平成20年度に“学生による授業評価”を実施した大学のうち、授業評価の結果を授業改善に反映するための組織的取組が行われているのは、582大学(約78%)。

Start Over

あんな授業評価をいつまで続ける気だ
 学生に教員を評価できるはずがない



1

外注にするか...



2

せっかくのアイデアも
 トップが変わってしまったから...



3

最初の頃は良かった
 最近はマンネリになってしまっ...



4

どうしよう回収率...



あまりに学生の自由記述
がひどい...



これらが解決すれば授業アンケートも安心？！



マネジメントに関わる視点(経緯の理解、ねらい、実施目標、実施組織、実施方法、アンケート項目、実施手順...)に加えて、「授業アンケート」そのものに関わるだろう視点をマインドマップに整理してみました。



何か足りない...
はまっている？！



こうした授業評価が行なわれるようになったのは、直接的には六〇年代末の学生運動がきっかけとなったとされているが、根底的には、アメリカ社会の消費者保護の思想に連なるものではなかろうか。大学教育というサービスを買う消費者としての学生に対し、彼らが適切な選択をできるように、先輩が授業をどう評価しているかの情報を提供し、消費者の権利を保護するという考えである。つまり料理のよしあしは、料理を食べた者に判断させるべきだという考えである。どんなに著名な学者でも、まず教師としての授業評価をまねがれることはできない。なぜなら、アメリカでは大学教授の任務は研究能力もさることながら、まず第一に学生の教育にある、と考えられているからである。

喜多村和之1990『大学淘汰の時代—消費社会の高等教育』(中公新書965), 125-6頁

それは自明？

- 今も「消費者」？
- 教員は「講師」？

teaching (teacher centered)
『教員が、何を(どのように)教えたか』
という考えにおける授業アンケート
＜満足度の時代＞

- 今や「学習者(として育てる)」？
- 教員は？

teaching & learning (learner centered)
『学生は、何が(どれくらい)できるようになった』
という考えにおける授業アンケート
＜学習成果の時代＞

悩みどころ

- 学生や教員の役割(学びの体現者へ)や授業観の変化(方略・方法の多様化)を踏まえたとしても...
- 授業実践の受講者評価から、学習経験や達成を自己評定へ、全面的にシフト？

悩みどころ

- 結局、「授業」を教育実践からだけでなく、学習成果といった側面を加えて評価するアンケート設計ができたとしても...
- 授業の責任は、一人(担当)の教員に？

その先は？

- 成績との関係？
- カリキュラム評価？
- 学生はどこで学ぶ？
- 「組織的に」とは？

Questions? Comments?

We are happy to help you!



Thank You !

gakutnk@artsci.kyushu-u.ac.jp

報告3「授業アンケート」が愚者なのか
大学コンソーシアム京都 第18回FDフォーラム 第3分科会
「学生による授業アンケートの現状と課題そして発展へ」
2013年02月24日(日)10時~15時30分
立命館大学(教学館)

中部大発「魅力ある授業づくり」～個を大切に「授業評価」～

中部大学 大学教育研究センター 次長

西川 鈺治

2013年2月24日
於:立命館大学

大学コンソーシアム京都 第18回 FDフォーラム
第3分科会 学生による授業アンケートの現状と課題そして発展へ

中部大発「魅力ある授業づくり」 ～個を大切に「授業評価」～

中部大学 大学教育研究センター
次長 西川 鈺治

CHUBU UNIVERSITY

CHUBU UNIVERSITY

与えられた課題・キーワード

- ◆与えられた課題
「中部大学における授業評価に関わる取り組み経緯と考え方
: 教職協働の観点も含め」
- ◆キーワード (分科会テーマ)
『学生による授業アンケートの現状と課題そして発展へ』

中部大学では ↓

学生による授業評価 ≠ 授業改善アンケート

Cumoc (キューモ)
Chubu University Mobile Clicker

第3分科会

CHUBU UNIVERSITY 中部大学の紹介

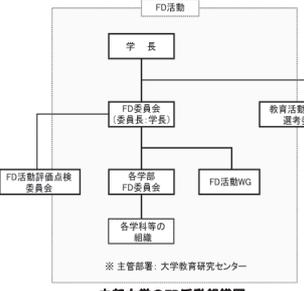


愛知県春日井市 <2012.5.1現在>

7学部	29学科	学生数	:10,088人
5研究科	15専攻	院生数	: 312人
		専任教員数	: 515人

CHUBU UNIVERSITY 中部大学の紹介

FD組織体制



- ◆FD委員会
本学のFD活動全般について学長を委員長として審議、検討をする。
- ◆FD活動WG (ワーキンググループ)
FD委員会の専門委員会として、学部代表のFD委員会を中心に主に全学的な活動を企画する。
- ◆FD活動評価点検委員会
本学のFD活動全般について、第三者的な立場にたつて評価点検する。
- ◆教育活動顕彰審査選考委員会
教育活動顕彰制度に係る重要事項、および受賞者の審査、選考する。

※ 主官部署: 大学教育研究センター
中部大学のFD活動組織図

CHUBU UNIVERSITY 中部大学のFD活動

FD活動へのアプローチ

FD活動重点目標:『魅力ある授業づくり』

1. 明るく、楽しく、元気があるFD活動
2. 草の根のごとく浸透するFD活動
(FDネットワークの構築)
3. 学外にも広く公開しているFD活動
(HPへの掲載)

CHUBU UNIVERSITY 中部大学のFD活動

中部大学のFD活動概要

FD活動重点目標:『魅力ある授業づくり』

- I. 教育活動重点目標・自己評価シート
- II. 『魅力ある授業づくり』への取り組み
- III. FDフォーラム・FD講演会
- IV. 教員キャリアアッププログラム
- V. FD活動支援経費の補助
- VI. 教育活動顕彰制度
- VII. FD活動評価点検

CHUBU UNIVERSITY 『魅力ある授業づくり』への取り組み

『魅力ある授業づくり』6つの取り組み

1. Webによる「学生による授業評価」
「教員による授業自己評価」
2. 授業改善アンケート(Cumoc)システムの提供
3. 授業改善ビデオ撮影支援制度
4. 授業のオープン化制度
5. 全学公開授業
6. 授業サロン

概要 : <http://www.chubu.ac.jp/fdp/>

CHUBU UNIVERSITY 中部大学「授業評価」

中部大学における「学生による授業評価」20年の歩み
(資料1から概要のみ抜粋)

1993 中部大学自己点検・評価委員会・授業評価検討小委員会にて「学生による授業評価」の検討開始

年次	授業評価	実施方法	実施時期・期間	対象科目	集計結果等の取扱い	その他
第1期 1995 ～ 2000		マークシート 無記名	学期後半の約 2週間程度	教員1人1講義 科目 → 全校 教員1人1科目	・集計結果を教員個人にのみ通知 ・自由記述の回答用紙原本は教員 本人のみ閲覧可能	
第2期 2001	「学生による授業評 価」実施			教員1人1科目	・科目別の集計結果と教員からのコメ ントを全体的な冊子を学生・教職員は 閲覧可能	
第3期 2002 ～ 2007		マークシート プレッラン ト記名	学期の前半 約2週間程度	全講義・実習科 目・複数担当等 を除く	・自由記述は担当部署において入力 後、教員個人に通知 ・科目別の集計結果一覧を学生・教 職員がWeb上で閲覧可能	・授業評価結果(平均ポ イント)を教育活動表彰 制度のポイントの一つとして活用
第4期 2008 ～	「学生による授業評 価」実施 教員による授業自 己評価」実施 「授業改善アンケー ト」システムの提供	Web(PC) 実質的に 匿名の方式 で記名	学期の14週以 降約2週間程 度	全授業科目・複 数担当科目を 含む	・自由記述は授業担当者のみ閲覧 可能 ・学生・教職員は全科目の集計結果 と教員からのコメントがWeb上で閲覧 可能	・授業評価結果(授業評 価ポイント)を教育活動 表彰制度のポイントの一 項目として活用

CHUBU UNIVERSITY 中部大学の「授業評価」

中部大「授業評価」文化は醸成された？

20年にわたる「授業評価」の実施方法の検討、施行の繰り返し&多面からのアプローチに裏打ちされて文化が醸成？

- ◆「授業評価」は、授業の感想ではなく、あくまでも“授業”の評価であり、“教員”の評価でもない
- ◆授業評価の結果には、教員が責任を持つ
- ◆平均ポイント等の数値にこだわらず、たとえ少ない回答であっても個の評価を大切に、「個々の授業の改善に直接資する」ことが重要
- ◆毎年の報告書は作成せず、必要に応じた分析等を行い、機を逃さない公表(直近5年で16回公表:資料2を参照)

CHUBU UNIVERSITY 中部大学の「授業評価」

◆個の評価を大切にする

回答者20人

	5P	4P	3P	2P	1P	平均P
Case1	5人	5人	5人	5人	0人	3.5
Case2	10人	0人	0人	10人	0人	
Case3	6人	8人	0人	2人	4人	
Case4	0人	15人	0人	5人	0人	
Case5	10人	8人	0人	0人	2人	4.6

○平均ポイントの陰にかくれた“個の評価の分布”
○平均ポイントの陰にかくれた“個の評価の重要性”

CHUBU UNIVERSITY 中部大学の「授業評価」

Webを利用した「授業評価」へ

2007年度まで、学期途中にマークシートで実施

【課題】

- 授業が完結してから評価したほうが良い
- 授業時間内にしか実施できなかった

【Webによる授業評価に変更】

- 学期末に複数担当者科目も含めて実施

◆集計結果や学生からの自由記述に対し、教員から学生へのコメントを発信して双方向性を高めた

◆学期末の実施のため、受講者に向けての授業改善の側面が減少した

CHUBU UNIVERSITY 中部大学の「授業評価」

「授業評価」と「授業改善アンケート」

授業評価
「学生による授業評価」・「教員による授業自己評価」

授業 (15+1週)

いつでも・何回でも設定・実施できる

授業改善アンケート

授業担当教員が、開講学期期間中に受講生に対し、随時、授業改善を目的としたアンケートの実施が可能

学期末1回

CHUBU UNIVERSITY 中部大学の「授業評価」

Cumoc の導入経緯

1. 授業評価
 - PCのみ → PC+携帯(学生評価)
 - 「学生による授業評価」
 - 「教員による授業自己評価」
2. 授業改善アンケート
 - PCのみ → PC+携帯(学生評価)
 - 授業担当教員が、開講学期期間中に受講生に対し、随時実施できる授業改善のためのアンケート
3. Cumoc
 - PC+携帯
 - 受講生が携帯電話やパソコンを利用して回答でき、リアルタイムにデータを回収できるクリック機能
 - 2010年秋学期運用
 - 2011年7月 教職員研修環境

CHUBU UNIVERSITY Web を利用した「授業評価」

Web 開発時に目指した点(こだわった点)

- 「教員による授業自己評価」の実施
→ 学生による評価との違いを、設問を対比させて“見える化”
- ◎ 回答は、実質記名ではあるが、匿名性を確保
- 可能な限りシンプルな操作性の確保
- いつでもどこからでもログイン(回答)が可能
- ◎ 教員から科目ごとにフィードバック(コメントの発信)を実施
→ 複数担当科目では、担当者全員がそれぞれコメントを発信
- ◎ 学生も教員も集計結果画面で、振り返りを促す仕組み
→ 自らの回答内容を表示 ⇔ Web だからこそ可能
- ◎ ログイン画面を明るいイメージに

CHUBU UNIVERSITY Web を利用した「授業評価」

ログイン 画面

ユーザーID
パスワード
ログイン

学生・教職員の方はログインしてください。

CHUBU UNIVERSITY Web を利用した「授業評価」

授業評価集計結果 画面

※本科目の平均ポイント ※あなたの回答 ※比較対象: 授業評価(全科目)

CHUBU UNIVERSITY Web を利用した「授業評価」

Web を利用して良かった点 1/2

- 総回答者数は減少したが、自由記述件数が10倍以上と大幅に増加した
※数値評価よりも、受講生からの“生の声”は教員に響く?!
- 自由記述(1000文字まで)の内容に、良い変化が見られた
※授業時に短時間で回答を求めているため、深夜に回答するなど、教員に何かを伝えたい学生が自発的に回答し、長文の意見が多くなった
⇒ 授業に対して前向きで建設的な意見が多くなった
⇒ 教員に対して感謝の意味を含む言葉が多くなり、誹謗中傷的な言葉が少なくなった

CHUBU UNIVERSITY Web を利用した「授業評価」

Web を利用して良かった点 2/2

- ◎ 集計処理および結果等の公表準備を早くできるため、タイミングを逃さない公表ができるようになった
※回答期間終了後 ⇒ 2日後に教員に担当科目分を公表
コメント入力期間終了後 ⇒ 翌日にすべての学生、教職員に向けて、全実施科目の集計、コメント等を公表

秋学期実施の流れ(まとめ)	2012年度 秋学期日程	学生による授業評価		教員による授業自己評価	
		学生	教員	学生	教員
	1月15日(火) ~ 2月14日(木)	授業評価実施			授業自己評価実施
	2月16日(土) ~ 3月8日(金)		集計結果閲覧(担当のみ) 授業担当者はコメント等記入		集計結果閲覧(担当のみ)
	3月9日(土) ~	結果公開(学生・教職員)			

CHUBU UNIVERSITY Webを利用した「授業評価」

Webを利用することで心配された点

①パソコンのOS&インターネットブラウザのバージョンアップ等への検証、および変更への対応が必須

↓

想定できない改修経費が発生

②計画時から想定済みではあったが、回答率は低下する
マークシート：約50~60% → Web：11.6%~30.7%
(964人~2,971人)

↓

中部大学では例え10%の回答率であっても、個の評価を大切に、真摯に受け止めていく！

CHUBU UNIVERSITY Webを利用した「授業評価」

心配された回答率への対策・対応 1/2

- 初期開発時に、お知らせメールの登録をできる仕組みを組み入れた
- ◎ すべての教員(非常勤も)に授業時に、受講生に対してたまらない呼びかけをお願いしている
- ◎ すべての教員(非常勤も)に対して、学生へのコメントの発信を呼びかけ、記入をお願いしている
※学生からの声に応えることで、学生が授業評価を実感！
- 初期開発時には導入しなかった携帯電話を利用した回答を可能にした(一部教員からは要望もあった)
⇒ Cumocを同時に導入
⇒ 2012年度にはスマートフォン専用画面の運用を開始した

CHUBU UNIVERSITY Webを利用した「授業評価」

心配された回答率への対策・対応 2/2

○ 回答者の属性分布に関する分析による回答の有意性について検討を行い、説明責任を果たした

「魅力ある授業づくり」への新たな取り組みと分析からの気づき、中部大学教育研究、No.10(2010.12)、および、中部大学第17回FDフォーラム(2011.3)報告から、いずれも杉井俊夫、松浦 均

CHUBU UNIVERSITY 「教職協働(教職協同)」

教職協働(教職協同)：中部大学

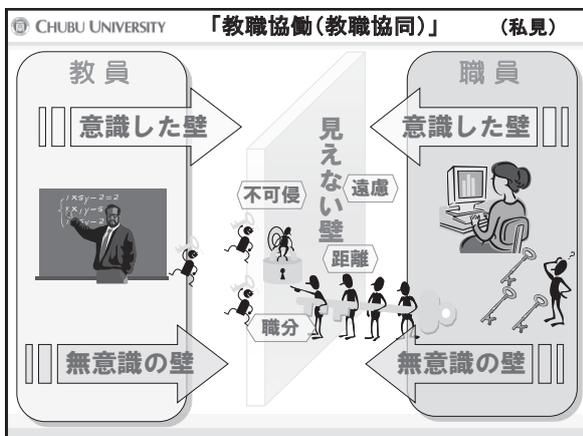
今回のミッションでの気づき

「授業評価」はその役割を終えたという声も聞こえます。

中部大学では、この20年間の授業評価の検討、実施してきたうえで、受講生の声を大切にするを念頭に、常に教員と職員、そして大学が一体となって授業を良くしていくことを考えてきました。

そして、今後も引き続き、受講生の“生の声”を受け止めるべく授業評価に取り組んでいきます！

そのうえで、今回、教職協働を改めて考えた・・・



CHUBU UNIVERSITY 今後の展開に向けて: 中部大学

FD活動へのアプローチ

FD活動重点目標:『魅力ある授業づくり』

1. 明るく、楽しく、元気があるFD活動
2. 草の根のごとく浸透するFD活動
(FDネットワークの構築)

*たとえ道のりは長くなっても、「やらされ感」のないFD活動(の仲間づくり)を粘り強く続けていきます!

CHUBU UNIVERSITY

中部大学発『魅力ある授業づくり』は、
学生と教員が協同して行うものです。

★魅力ある授業
(学生にとって) 興味を持って聴ける授業
将来において役立つ授業
(教員にとって) 学生の成長を実感できる授業
学生から感化を受ける授業

★授業づくり
(学生が目指す) 自主的に学ぶ態度、知識・技術の修得
(教員が目指す) 授業改善、授業スキルアップ
(学生と教員が目指す) 双方向のコミュニケーション

CHUBU UNIVERSITY

ありがとうございました。

中部大学 大学教育研究センター
次長 西川 鉦治

代表アドレス : kyokenc@office.chubu.ac.jp
ホームページ : <http://www.chubu.ac.jp/fd/>

(資料1) 中部大学における「学生による授業評価」20年の歩み

検討期 1991(H13)年 大学設置基準の大綱化
 1992(H14)年 中部大学自己点検評価準備委員会設置
 1993(H15)年 中部大学自己点検・評価委員会に改組、同委員会・授業評価検討小委員会にて「学生による授業評価」の検討開始

区分・年度	時期	授業評価	実施方法	実施時期・期間	対象科目	設問	回答評点	集計結果等の取扱い	その他
第1期 1995 ～ 2000	1995(H7) 前期	「学生による授業評価」実施	マークシート・無記名	学期後半の約2週間程度	原則として教員1人1講義科目	1種類(10問)+自由記述	5～1	<ul style="list-style-type: none"> 集計結果を教員個人にのみ通知 自由記述の回答用紙原本は教員本人のみ閲覧 	<ul style="list-style-type: none"> 自己点検評価準備委員会が担当し、教務課が実施担当部署 1996(H8)後期までは設問の見直しを毎学期行っている。
	1995(H7) 後期～				原則として全授業科目	授業形態別に5種類(10～11問)+自由記述			
	1996(H8) 後期～					授業形態別に6種類(11～12問)+自由記述			
第2期 2001	2001(H13)				原則として教員1人1科目に変更	授業形態別に5種類(14問+α)+自由記述	9～1 (回答不能欄あり)	<ul style="list-style-type: none"> 集計結果を教員個人に通知 自由記述の回答用紙原本は教員本人のみ閲覧 科目別の集計結果と教員からのコメントをまとめた冊子を学生・教職員は閲覧可能 	<ul style="list-style-type: none"> 自己点検評価準備委員会が担当し、教務課が実施担当部署
	2002(H14)～	「学生による授業評価」実施	マークシート・プレプリント・記名	学期の中ごろ約2週間程度	原則として全講義・実習科目：複数担当等を除く	共通設問(5問)+自由記述	5～1 (回答不能欄あり)	<ul style="list-style-type: none"> 集計結果を教員個人に通知 自由記述は担当部署において入力後、教員個人に通知 科目別の集計結果一覧(印刷物)を学生の希望者・教職員に配付 	<ul style="list-style-type: none"> FD推進委員会が担当し、大学教育研究センターが実施担当部署に変更 第3期内で設問の見直しを2回行っている。
	2004(H16)～					共通設問(5問)+学生自身への問いかけ(1問)+自由記述			
2006(H18)～						5～1		<ul style="list-style-type: none"> 授業評価結果(平均ポイント)を教育活動表彰制度のポイントの一項目として活用 	
第4期 2008 ～	2008(H20)～	「学生による授業評価」実施 同時期に「教員による授業自己評価」実施 「授業改善アンケート」システムの提供	Web(PC) (実質的にログインするの で)記名	学期の14週以降約3週間程度	全授業科目：複数担当科目を含む	共通設問(8問)+学生自身への問いかけ(2問)+自由記述	5～1 (回答不能欄あり)	<ul style="list-style-type: none"> 自由記述は授業担当者のみ閲覧可能 学生・教職員は全科目の集計結果と教員からのコメントがWeb上で閲覧可能 	<ul style="list-style-type: none"> FD委員会が担当し、大学教育研究センターが実施担当部署 授業評価結果(授業評価ポイント)を教育活動表彰制度のポイントの一項目として活用

(資料2) 中部大学における「学生による授業評価」の取組み・分析等に係る公表内容

区分	時期	集計結果等の分析等の公表	備考
第1期	1998(H10) 2月	『中部大学通信』124号にて総括を学内外に公表	
	1998(H10) 6月	『ANTENNA』特集号にて教員座談会記事を教職員向けに公表	1998(H10)年2月 教員座談会を開催
	1999(H11) 10月	『中部大学通信』特集号にて学生座談会記事を学内外(主に学生向け)に公表	1999(H11)年3月 学生座談会を開催
	1999(H11) 10月	『授業評価について』報告書発行 教職員にのみ配付	
第2期	2001(H13) 10月	『学生による授業評価 平成13年度前期』発行 学内の学部事務室窓口や図書館等で学生・教職員が閲覧可能	実施全科目の科目別の集計結果と担当教員のコメントをまとめた報告書
	2002(H14) 3月	『学生による授業評価 平成13年度後期』発行 学内の学部事務室窓口や図書館等で学生・教職員が閲覧可能	実施全科目の科目別の集計結果と担当教員のコメントをまとめた報告書
第3期	2003(H15) 2月	第6回FDフォーラム 平成13年度前期授業評価の分析報告	
	2004(H16) 1月	『中部大学教育研究』No.3 【研究論稿】『学生による授業評価』の効果的利用に関する考察 中部大学の実践経験から	三浦真琴(～2003.9:副センター長)
第4期	2008(H20) 4月	『ANTENNA』No.85にて教職員向けに公表 『魅力ある授業づくり』への新たな挑戦－Webによる授業改善アンケートと授業評価システム－	同記事はHPで学内外に公表
	2008(H20) 5月	『ウプト』166号にて学内外(主に学生向け)に公表 『魅力ある授業』を一緒につくろう	
	2008(H20) 11月	『ウプト』168号にて学内外(主に学生向け)に公表 2008年度春学期Webによる授業評価を終えて「魅力あふれる中部大学にしよう！」	
	2008(H20) 12月	第15回FDフォーラム 2008年度春学期授業評価を終えて－「学生による授業評価」における自由記述から－	
	2008(H20) 12月	『ANTENNA』No.89にて教職員向けに公表 2008年度春学期授業評価を振り返る	同記事はHPで学内外に公表
	2009(H21) 5月	『ウプト』170号にて学生座談会記事を学内外(主に学生向け)に公表	2009(H21)年3月 学生座談会を開催
	2009(H21) 5月 7月 11月 2010(H22) 2月	『ウプト』170号～173号にて学内外(主に学生向け)に公表 シリーズ「魅力ある授業づくり」への一歩 第1回 2008年度春学期・秋学期授業評価の回答率 第2回 授業評価の自由記述の傾向 第3回 学生による授業評価と教員による授業自己評価 第4回 学生と教員が考える魅力ある授業とは？	
	2009(H21) 7月	第16回FDフォーラム 『魅力ある授業づくり』への挑戦－1年目を振り返って－	
	2009(H21) 12月	『中部大学教育研究』No.9 【教育資料・実践報告】2008年度春学期・秋学期「授業評価」における学生の自由記述からみた授業イメージ	杉井俊夫(副センター長)
	2010(H22) 12月	『ANTENNA』にて教職員向けに公表 魅力ある授業づくり－Cumocを活用した双方向対話型授業への取り組み－	同記事はHPで学内外に公表
	2010(H22) 12月	『中部大学教育研究』No.10 【教育資料・実践報告】『魅力ある授業づくり』への新たな取り組みと分析からの気づき－2008-2009年度授業評価から－	杉井俊夫(副センター長) 松浦 均(客員教授)
	2011(H23) 3月	第17回FDフォーラム 『魅力ある授業づくり』へのかけ橋－Webによる2年間の授業評価結果から－	学生も参加可
	2012(H24) 12月	『ANTENNA』にて教職員向けに公表 魅力ある授業づくり－学生が自主的に学び続ける新たなステージに向けて－	同記事はHPで学内外に公表